

むらさき

川柳句文集

むらさき

黒川紫香



よろこびの日の筆者

序 文

黒川紫香さんが、尼崎市文化功労賞を受賞された記念として、川柳句文集『むらさき』を発刊されることになった。そしてその序文を書くようにという光栄に浴した。

紫香さんのことなら書くことが沢山あるので、欣喜雀躍してペンを執った。

紫香さんの第一句集は、昭和三十三年秋に、水客氏、潮花氏と仲よし三人で、『二人』という題で川柳雑誌社から出版されている。句集三人は当時二〇〇円で発売されたが、昭和四十年頃、阪急の古書販売市場で、三千円で出ていて愕いたことがある。今度の『むらさき』はどんな値段になるか大変、楽しみである。

紫香さんの人格というのは篤実な所業にある。例えば「むつつり右門」そつくりの素晴らしい人物である。大きな声を出さずに、ユーモラスな言葉を、ポソポソと吐いて、ニッと笑われるところは、紫の衣を着た大僧正の風格がある。

謹厳実直の半面ユーモリストである。

また、旅行が大好きで旅のプランメーカーである。唯今の川柳塔のプランは紫香さんに負うところが多い。

紫香さんには非常にファンが多い。もう故人になられたが、西川善一さんは善紫という柳号をもらって紫香さんを慕っておられた。男性は勿論のこと、女性ファンが雲霞のように取り巻いている。西宮句会が今日の盛会になったのも紫香さんの立派な人格と完熟した人徳からである。私はまだ句集『むらさき』を見せてもらってないが、そんな立派な人格者の句集だから、愚かな句のあるはずがない。紋太さんは「句は人なり」と言われた。紫香さんの句を読んでみると全くそのとおりである。路郎先生は「川柳は人間陶冶の詩である」とおっしゃった。紫香さんの句を読んで、我々は大いに陶冶していかねばならないと思う。

また、紫香さんの一面を語るのに、歌舞伎芝居が非常に上手であるということだ。昔、大阪に「福井座」という立派な劇場があつて、その芝居小屋を、正本水客さんのお父さんと、紫香さんのお父さんと共同経営しておられたので、

小さい時分から芝居は堂にいったものであった。「曾我対面」では工藤祐経をやられたり、「山崎街道」では定九郎を演じられて、ヤンヤの喝采をあびられたという逸話が残っている。

さらに、野球が大変お上手で、キャッチャーというポジションは、彼にうってつけで、沈着にして果敢、よく一軍の支柱として扇の要的存在である。我が川柳塔社の長老としての副主幹は正に適役で、感謝しても感謝しきれない。

最後に、非常に慈愛深い方で、生きものを温かい目で見られた句は、抜群である。句集『むらさき』には、どんな生きものが、どんな姿で出てくるかが大変楽しみである。

ともあれ、五十有余年の川柳キャリアをもつ紫香さんの句は噛めば噛む程味の出る佳什、秀吟で読者をして川柳三昧境に誘われることは間違いない。されば紫香さんと同時代に生きた我々は幸福そのものである。粗辞を並べて序文とする。

師走十五日

水鶏庵にて 栞 識

序 文

原稿用紙一枚と限られた序文は難しい。そこで、黒川紫香さんの真骨頂を考えた。

紫香さんは、大久保彦左衛門である。

関西での名だたる実業家、小林一三に少年の頃から身近に仕えて、鍛え上げられた性根だけを取り上げても、畏敬に値する。

紫香さんは、丁未生まれだが、私はお猿さんを連想する。三猿主義、つまり、「見ざる聞かざる言わざる」の人だと思う。人の短を見ない、人の非を聞かない、人のあやまちを言わないという戒めを、骨の髄まで心得ておられる。炯眼よく物事や人物の本質と裏面を見抜きながら、謙虚なのである。それ故、その一言は万金に値する。

小林一三が、後年久しぶりに出会ったとき、「小僧大きくなったな」と声を掛

けられた意味は、なまなかな賛辞ではなかったのである。

川柳塔社の重鎮の句文集『むらさき』を、是非一冊、あなたの机辺に備えられんことを。

橘 高 薫 風

序

シダレサザンカ

伊豆の稲取温泉に善応院という古寺がある。その境内にシダレサザンカの珍種がある。高さ三米ほどの老木であるが、枝垂れの山茶花は珍しい。私が訪れたときは花の盛りを過ぎて赤い花びらが樹の下に散り敷いていたが、樹には由緒を誇るかのように美事な花が見られた。自分の持ち味を守って他におもねらず、それでいて優しさを失わない紫香さんのイメージを、人気のない境内に佇

んでサザンカの花にダブらせていた。

川柳を始めて節目節目に壁に突き当たるのをよく聞くが、私には幸か不幸かその経験がない。ライバルとは意識しないライバルとして紫香さんの存在があったからだと思う。彼もまた同じ感懐を持っていたことと思う。

紫香、潮花、水客の句集『三人』が路郎先生の勧めで世に出たのが昭和33年11月のことだから30年の月日が流れた訳である。この度、紫香さんが尼崎市の文化功労賞を受けたのを機に句文集を出すという。立派な箱にはいつて本箱に飾っておくような物でなく、座右の書として持ち歩ける温みのあるものを望みたいと思う。

正 本 水 客

もくじ

序 文

西尾 栞
橘 高 薫 風
正 本 水 客

紫香を語る（路郎・葭乃・潮花・いさむ）…………… 10

むらさきのうた（昭 8 — 昭 20）…………… 17

（昭 21 — 昭 40）

（昭 41 — 昭 55）

（昭 56 — 昭 60）

（昭 61 — 昭 63）

むらさきの旅路（日本よいとこ）…………… 120

（海 外 編）

むらさきの章（十二編）…………… 165

あ と が き

紫香を語る

(昭31・12 『川柳雑誌』から)

— 語る人たち —

麻生 路郎 麻生 葭乃

丸尾 潮花 菊田 いさむ

(若柳)

司会 きょうは葎乃先生の六十五回目のお誕生日ですが、この日に黒川紫香氏を語る座談会を開くことは意義深いものがあります。恩師としての路郎先生、葎乃先生、小学校時代からの竹馬の友としての潮花氏、職場と趣味の後輩のいさむ氏と、役者がそろったところで、葎乃先生から幕を開けていただきましょう。

葎乃 そうね。(ちよつと考えて)紫香さんは、お芝居で言うなら“だんまり”なんです。ですから永いおつきあいをしていても、あまり多く語り合わないので、くわしいことは知りませんが、とにかく口数の少ない、ズバリ実直型の人ですね。

いさむ よい意味でいうお人好しです。職場でもうるさい仕事を頼みにゆくと、返事もせず、その仕事を片付けてくださるが、別に返事をしないからといって、いやいやするのではないのですね。む・つ・つ・り・右・門・という役どころでしょうか。

潮花 頼まれると嫌と言えない気の弱いところがある。

路郎 そういう人に金を借りに行くんだね。(笑)

いさむ イヤよく貸しては返してくれないと、コボされていることもありました。(笑)

潮花 彼は非常に子煩悩である。孫もいるし、今は幸福の絶頂かも知れない。

いさむ いつも何か考えていますね。

潮花 何かことがあると涙ぐむ。やっぱり気が弱いのだな。

路郎 しかし、芯は強い。でなかったら会社で役をもたされたり、句会部の責任者なんかにはなれないからね。

潮花 あれでなかなかユーモリストなんですよ。

いさむ 旅行のプランを樹てるのはうまいもんです。バス、電車、汽車、船と非常に乗物をうまく利用するので会社でも有名です。

路郎 句会のプランなんかもうまいよ。

潮花 その旅行プランで思い出したが、月ヶ瀬へ行った時は、時間の計り損いで真暗になってしまつて、梅が見られなかったことがあつた。夜桜には雪洞（ぼんぼり）が点いているが、夜梅には一本参りました。あれで日記もつけているし、キッチリ屋です。

いさむ 愛妻家でもあるし……。

路郎 酒もあまり飲まないから女の失敗もなく、奥様からみればいいご主人だね。潮花君のように、婦人からレターもこないだろうし。

潮花 先生、わたくしも愛妻家ですよ。紫香君に負けないくらいです。水客君も愛妻家だし、この三人組はその点よう似ています。三人寄つても飲む相談はせず、ぜんざい食べようか——という甘い方です。

司会 一つ少年時代の話聞かせてください。

潮花 紫香君と僕は「中津第一小学校」時代からの学友でした。小学校の頃は、あまり紫香君とは遊ばなかつた。というの、その頃の彼は、僕より背が相当大きかつた。大体子どものころは、ノッポとチビは遊ばなかつたようです。四、五人連れの子どもたちを見ても、やはり今でも背の高さが同じようなのがそろっている。

いさむ 紫香さんは、そんなに大きかったのですか。

潮花 中位かな。僕が小さ過ぎたのでしょう。(笑)

いさむ 今の紫香さんは小さい方ですのね。

潮花 背が伸びずに顔だけ大きなりよってな。(笑)卒業する時、どこへ行くのかと訊ねたら、例によつて何も言わなかったが、次に逢つた時はチャンと阪急へ勤めてました。

路郎 三十何年間勤続ということをこの前来た時、聞かされて驚いたよ。阪急の生き字引的存在だね。

潮花 十五、六歳の頃、同人雑誌「トンボ」を発刊した。その頃からすでに文学の芽は伸びていた。ある同人が「脱走」という赤がかった作品を発表して、警察から調べにこられたり、家へ帰つても刑事が来ているように思つて、十三の河原で日がトツププリ暮れるまで頭を抱えてピクピクしたことがあつた。その後、「文の雫」というのを出しましたが、その頃から三人は川柳をやりだしたのです。早作りの練習もその頃ともにやりました。

司会 趣味は文学一本ですか。

潮花 水客君のお父さんと共同で劇場を経営していた父をもつ彼は、よく芝居を演つたものです。水客君とは親戚で、彼のお母さんは三味線も弾くし、いわば芸道に生きる両親をもつた彼でしたから、芝居なんかなかなかな堂に入ったものでした。「曾我対面」では敵役の工藤を演つた。僕は五郎と舞鶴の二役をしました。

葭乃 優しい五郎ですね。

潮花 「山崎街道」では紫香君の定九郎、僕の与市兵衛。

いさむ 初演定九郎の仲藏以来の名演でしたでしょうね。(笑)

路郎 紫香、水客両君のお父さんらが経営していたという「福井座」なら僕もよく知っているよ。

潮花 風葉君(故人、元不朽洞会員)が脚本を書いて全十五場という大作で、途中で時間がなくなつて、その日に片付かなかつたのがあつた。芝居の出来んものは幕引きをさせられました。(笑)

いさむ 野球も好きですね。

潮花 よく他へも試合に行きましたが、僕はもっぱら記録係で、スコアブックを提げてついで行つたものです。50対0で負けたことがあつたが、まるでラグビーのスコアみたいだった。あんな荒い試合にはソロバンを持って行かぬと、点が何点入つたのかわからなくなる。

いさむ 紫香さんのポジションは？

潮花 キャッチャーです。

司会 これで、先刻、路郎先生が芯が強いと言われたことがわかりました。小西得郎張りで言うなら、コレハ、ナント申シマシヨウカ、捕手とは強肩にして強打、沈着にして果敢を生命とするだけではなく、よく一軍の支柱として扇の要的存在でなくてはなりません。紫香氏を知る好材料を得ましたが、次は作品に就いて。

葎乃 土の匂いがする句が多いそうですね。潮花さんとは対照的作家という感じがします。

菜の花の中に役所があるばかり

二三匹蛙は川へ逃げ損ね

乞食にも喰わず嫌いがあると見え

信号を待つ間に馬はよそ見する

いさむ 虫や動物の句が多いですね。

路郎 箕面に住んでいたこともあるだけに、虫の句は確かに巧い。

いさむ 句会で虫の題が出ると、ああまたやられる、と。もう作句ができなくなります。

潮花 虫が好かんのやな。(笑)

いさむ 虫のなかでも、蛙の句は特にお得意のようですね。

みんな寝てしもうて母のいい月見

蟬持つて客へ挨拶する子供

灯を貸して夜警も探す落し物

片っぽの下駄で蟹とり帰って来

戸をあける音さえ違ふ長女次女

司会 ではこのあたりで幕にしたいと思います。ご多忙のところ有難うございました。

(司会・筆記 不二田一三夫)

むらさきのうた

戸を開ける音さえ違う長女次女

(昭8—20)

三人が三人寝てて盗られてる

三人で歩駒を探す涼み台

乗り越しを下ろして尾灯揺れて行く

ふと強く酒の香がする別れ際

石垣へ並んで憩う東西屋

ふと麒麟遠くの方を振りかえり
にわとりが二羽郵便屋に追われて来

金魚もう動かず冬の覚悟する

ひと盛りになって蛤舌を出し

蛇下げた子供に道を聞くも夏

鯉節 太平洋の塩の味

草みんな泳いで一機飛び上り

道間えば農夫一服吸いつける

教会へ英字新聞投げ込まれ

もう一人待つ座布団へ猫眠る

段梯子で客の名前をそつと聞く

看護婦は廊下を迂る様に来る

いかけ屋へ立つ子の一人悪さそう

鏡台へ来て女の子静かなり

戸口調査巡査が笑う子沢山

番号をつけデンデン虫を庭へ捨て

蝶ちようへ先頭少し立ち止り

豆の花柵出る牛の鼻を撫で

ステッキで来ればカマキリ身構える

ひとつずつ蛙がはまる田舎道

リヤカーに積める世帯に犬も乗る

また何か夜店帰りの父は提げ

その筋でのろけ本気で叱られる

お隣で火種を貰う共稼ぎ

叱られている子へ外から誘いに来

賑やかに戻って女房芋をくれ

子供等は蛙の腹をうれしがり

長男は堅い会社へ勤めさせ

これだけで食えと辞令渡される

水筒の中で茶柱立っている

ポンポン船恋を見て行く中之島

いい夢はみんなに話してしまふ

手囲いで恋の便りが書かれたり

貰い風呂ついでに西瓜よばれて来

噂ふと帰った女へむけられる

立見席切られるとこをのび上り

親分はおっちょこちよいを一人連れ

菜の花の中に役場があるばかり

井の蓋へ勘定払うて去に

門口で傘をひろげて貸してくれ

つつましく住んで表札名刺なり

物干の上でこの家借るときめ

植木鉢置くところがある家を借り

一人ずつ酌いでお内儀は席を立ち

配給へ芸妓も来てる昼の月

二三べん叩き木魚の向きを変え

僧衣が少うし木魚の端にふれ

夜業して戻れば木魚叩く母

サーベルをとれば巡査も将棋好き

弟に辞書を譲って学徒起つ

太鼓橋下駄を抱えて下りてくる

半分は焚火に背を向けている

一家みな坊主枕を外して寝

バスガール五銭をもらたままよろけ

アツハツハアツハツハで事が済み

請求書チップを乗せて返される

千早城ここで戦畧聞かされる

京都へは降りず八ツ橋一つ買い

達者達者とただそれだけの軍事便

慰問文こどもに書かすところを空け

父と娘の暮しへひよこ一つ飼

(昭
21—
40)

妻の死に会う（八句）昭23・5

朝さむし今日から減った米をとぐ

分担を決めて父と娘の暮し

家計簿が二月で切れたさびしさよ

遺骨を抱けばホロホロ雨が降り

雨の駅妻が迎えに来てそうな

いろいろな薬の袋だけ残り

通学と通勤遺骨だけ残し

間違えて母の名呼んだ娘のえくぼ

ネクタイもおんなじ柄さ君と僕

腕まくりしながら注射のぞきに来

ふたりして押売りへ出る若夫婦

自転車で寄るだけにする十二月

門前に牛つながれた春の寺

思いきり下ってカメラ塔も撮り

また子供出来たらしいと苦笑い

十八番出すだけ出して寝てしまい

二三服渡舟で売れた薬売り

名灸を訪えば野良着ですえてくれ

注射器を持ってば遠慮をしない女医

裏町へ医者は歩いてやってくる

縄飛びのまままで越え行く水溜り

駅長が長靴で出る山の駅

しゃっくりをし乍らお内儀せわしそう

キャンデー屋ベンチの恋を見逃さず

王手飛車かけて一匹蚊を殺し

ホルモンの見本のような妻を持ち

また何か踏んで戻った十二月

さて布団折り折り職を頼んどき

人妻ときれいな話して別れ

臨終へ女中も隅へ泣きに来る

嫁の荷を交通巡查も楽しく見

船世帯虹を見乍ら昼にする

炎天を真っすぐ盲導犬が来る

強盗も落日の家と見て帰り

ぽとぽとと冬の笥は淋しいね

死に行く汽車の煙が眼に入り

山の池ポツンと釣っているもよし

窓口へ来ても色気のある芸妓

金時を三つ頼みに来た日傘

抜け道のこんな所に旨い水

同期生飲もか飲もかとやって来る

風邪薬飲んで一算また合わせ

怒るのに鉛筆がいる課長なり

一人ずつ客を見に来る子沢山

親の靴子の靴違うところが減り

子を一人女風呂から届けられ

托児所の昼寝きれいな陽が当り

父ちゃんが来た来たという一号の子

ろうそくの影は悪魔になっている

銀行の門灯やもりが来る暑さ

釣り竿で落した下駄を搔き寄せる

屋根瓦落ちそなとこで柿が熟れ

死刑囚のでんぼに薬つけてやる

キッスなんてと女房可笑がり

みんな寝てしもうて母のいい月見

蚊張吊つてしばらく表へ涼みに出

夫婦して麻雀負けて来た月夜

手あぶりで銚子ぬくめる差向い

人形も入れて嫁の荷が届き

また犬とほたえて帰る出前持ち

如才なく子猫ももろて帰るなり

おっさんも巨人びいきかと靴磨き

バスガイド富士を斜めに見て話し

お隣の桜の花を掃かされる

或る日パパ 動く玩具でよく遊ぶ

ストーブに手袋を干す山の小屋

がやがやと町内中に見舞いに来

ちっぽけな相談耳だけ貸して済み

旅の雨しばらく女中話しに来

茶店から先は一本道になる

淀川へ来れば少しは風があり

宿帳を一人に委せお湯に行く

石段を仰げば鐘が一つ鳴り

代書屋をはじめましたと生字引

言うままになって花嫁出来上り

ひと束になって斬られたエキストラ

胸算用している肩を叩かれる

ふとのぞく夜中の月が美しい

開けっぱなしの玄関になるご臨終

水ひいた様に法事の客が去に

辞めたのが会社へ何か売りに来る

どたん場で女の知恵が恐ろしい

お茶飲んでるのが代筆させている

祭礼に天狗の面も酔うている

一円の釣りを走って来て渡し

算盤の合わない方が音をたて

撒き水で蟻が四、五匹流される

また名所おんなじところを写される

踏切りの日傘は後ろむいて立ち

糊効いた浴衣も嬉し山の宿

発展へ支店をつくる話が出

上げた足下ろすところがないラッシュ

さくらさくらガイドの指の先で咲き

天の声まだまだ君の席はない

(昭
41 |
55)

急いでまんねとしやべりまだしやべり

立ち話犬はとうとう座り込み

灸すえて一日ずつを大事がる

二枚目の親悪役で名が知られ

どこでどう迷うたか都会にいる蛙

しばらくは茶漬の音で待たされる

割箸に七味はさんでうどんが来

きつちりと定期を出せば見てくれず

二、三軒つつ抜けにした御用聞き

約束があると時計を見せて去に

昔居た借家で少し雨宿り

後輩の課長が課長と呼んでくれ

梅雨晴れの北山杉が美しい

やけくその唄でおでんが煮えている

団体が去んでスリッパ裏返えり

さびしいね蜂も飛ばずに秋の雲

国道で犬ひかれかけひかれかけ

親と子の自転車春の土堤を行く

堀くぐる下水花びら浮かせて来

こおろぎが鳴くよと下駄をしのばせる

眼が覚めてやっぱり一人という広さ

封筒の裏を見てから封を切る

急流の速さ花びらためらわず

綿ぼこり裾の動きについてくる

飛びこんで来た虫つかんで去る女中

牡蠣を割る女の指が逞しい

ガラス戸に露が溜っている寒さ

騙された方の瞳が美しい

毒づいて女本心見せじとす

生意気にもう呼び捨てにする友が出来

一軒をつぶして二軒建ててて売り

すんなりと去んで気持が悪くなり

来た来たともう先生を馬鹿にする

周囲みな建て替え我が家だけ平家

いろいろな子が来て広場夕焼ける

さり気ない店で煮豆のうまい店

高見山転ぶところを写される

来年も来るぞと補欠土を蹴る

五分五分の酒量で二人とも茶漬

壁面に座して静かに策を待つ

人間の世界へスルリ蜘蛛が下り

女の意地は蛤の舌に似て

屠殺場へ口動かせて牛が行く

身心を脱落させて枯野行く

拝観謝絶と書いて竹の鳴るお寺

はんなりとしてますなあと窓を開け

底減ってからが自分の靴になり

夫婦して母呼び寄せる話する

祝電が来ても段取りまだつかず

十円を拾うて寒い道になる

亡き妻に逢える鐘ならつづけよう

信心をしても亡妻には近づけぬ

下手くそなお経を亡妻が笑ろてそう

一本の八重歯が抜けて母になる

台所で出す汐時を待っている

なんの薬やと覗きこんで聞く

捨て石が捨て石でない動きする

まっ直ぐな道があるから飛車を打つ

ウインドで人形の一つ脇見する

ゴチャゴチャでマラソン出発してしまい

日付変更線に雲ばかり飛ぶ

水平線なんぼ漕いでも行きつかず

ビル伸びて来ると地球がこけそうで

流れ星次の宇宙へ行く様に

カラス一羽波の高さを計ってる

四季の花咲かせ一軒立退かず

ひと筋の滝があるから祭られる

ローマ字があるから駅の名が判る

飛瀑玲瓏として不動に似る

蠟人形愛の瞳が見つからず

屋上へ出て大阪を見せておく

鱧の皮きざむ母あり冬動く

当分はここに落着く畳替え

ポンと乗る石だつてある大鳥居

湧き水が小さな魚呼んでいる

爺ちゃんにお子さまランチあげたいね

軒借りて子供相手の店を出し

ポケットで素直になれぬ金がある

寒蠅よ動くな外は吹雪だよ

ゴキブリの長寿につくきまでの色

名君も馬鹿殿さんも居たお城

楯持って転任先の土を踏む

集金に來れば線香の匂いする

竹の寺風の音だけ灯が洩れる

頂上に來た声になる登山靴

本音聞くコーヒに砂糖入れてやる

(昭56—60)

仔犬みな貰われ雌犬日向ぼこ

負け犬がもう飛び越せぬ水溜り

老犬に重たくなつて来た首輪

老樹いま眠ることしか考えず

日照権老樹そ知らん顔をする

塔の影京の藁を越えに越え

参道の砂利にパチンコ玉一つ

幽霊が居るから此の世だと思ふ

豆の木がないので天に昇れない

アリバイのない一日の恐ろしさ

出て来いと夫機嫌のいい電話

てんでんばらばらに春を吸うて来る

テープカット小っちゃな社長に髭がある

家出した少年の持つハーモニカ

風船の悩みは空が高すぎる

シナリオを枢の中で書き終る

軍艦が並ぶと空が黒くなる

天馬かな白い夏雲よく走る

電柱に登ってみたい熱帯夜

城門に今の掟が書いてある

スケッチをするベレー帽に来る蜻蛉

折鶴を貰い外人ひとり病む

一十一 三になりそで式を挙げ

フルーツが森を少しずつゆする

寒い日は鼻水垂らす鬼瓦

シナリオを書き終え鬼の面はずす

脱ぎ捨てた靴が疲れた顔をする

愛人でいいわと怖いことを言う

こそ泥がついでに盗む風邪薬

いっぺんは毛皮も着たい若い尼

手話と手話電車の中を明るくす

女医が来て明るい村の診療所

雑巾をしぼって嘘を聞いておく

小姑と映画のことでリングゴむく

裸婦の絵がひとりの僕を責めたてる

受賞式今日の白髪が美しい

風紋に消えた女の白い肌

がむしやらに母なる川へ戻る鮭

無理のない値段でっせと取り合わず

判捺すとがんじがらめにさせる紙

どぶ板に人情噺が落ちてある

ろくでなし通天閣が大好きで

モーニングコーヒタベの罪に責められる

戸を少し押しつつ風が何か言う

過去帳に情死したとは書いてない

一丁目一番地に住む蛙

いつ来ても象は昼寝などしてず

ロケーションの隙間を狙う鳩が居る

何か言うたかと寝汗拭き乍ら

社長或る日精力剤を飲んでいる

飾るものなくとも尼僧美しい

遠足をしてから先生好きになり

腕章をすると中へも入れそう

ドアみんな開いて降りたのは一人

すれ違う髪で色街だと思ふ

笹舟がつくった波は平和です

美しい金魚はいつも逃げまわる

けったいな石を拾うて来て磨き

子育ての鬼は戻って豆拾う

地球儀のどっかで弾丸の音がする

何気なく見逃す駅でロケーション

散る桜敷くと野犬も眠くなる

馬鹿になるときこの歌唄うだろ

この村を出ると噂をするだろう

父ちゃんの知恵では悪いこと出来ぬ

あんたまだ一人だっかと亡妻笑う

亡妻と対話に愚痴も言う仏間

亡妻に齢を貰って喜寿の箸

妻の忌にふと歳月をふりかえる

夢で逢う亡妻は怒ってなどいない

暑いのかいつもの犬が顔出さぬ

鉢巻を陽気な章魚が欲しくなる

身ごもった蛙矢鱈に飛びつかぬ

手の平で睨みをきかす雨蛙

隣から花がおしゃべりしてくれる

飛んで来たボールを隠す草がある

テトラポット機嫌の悪い波と知る

浮き沈みやがて場末で唄うだろ

その先を話すと誰か罪になる

追われてる間にも一つ掏ったすり

影法師許す言葉を待っている

警官が来てから話もつれだし

地下室に置くと無気味な箱になる

遠くから届いた文に波の音

米すこし多めに洗い客を待つ

みずうみに女がひとりドラマかな

断崖で踏み止まった石もある

紫水晶或る日虜になる女

尾を振って少し修羅場を切り抜ける

矢を放つその一瞬に刻がある

前例がないから判がまだ捺せず

いい別れしたなと思う寒の月

ふりむけばレンズの中にいる私

恨みなどひと言もない置手紙

信用があるのか鞆持たされる

その答トイレの中で考える

土壇場に出す白旗が見つからぬ

会釈して遠くで尼僧庭を掃く

ゲームセットやっど審判月を賞で

大声で戻って来るのは父だろう

手にキッスしときそれから来てくれず

やわらかいお手だと握り返される

手を振った人は味方の数に入れ

止り木を一つ譲って打ち解ける

どの辻を折れても京に寺がある

潮花逝く（昭59・9・10）

秋さみし死出の旅路に舞扇

カフェーでコーヒ長居をした潮花

小ささをふたりで唧ち持つ絆

夜を曳く屋台を洗う昼下り

蝶になるその日激しい雨に逢う

今度来た隣の犬もよくなつき

笹舟にしばらく乗った糸とんぼ

水溜り影も一緒に飛び越える

花活けて花の師匠が安らぐ日

森を出た少年の吹くハーモニカ

いつの間かビニール袋にいた金魚

飾ったら座るところない部屋に住み

遠くから見るので銀河美しい

女史いつも離婚届を持っている

すんなりと去んだら電話かけて来た

夫婦独楽男の独楽が息切れる

はぐれると森は迷路になってくる

焼く準備出来たが魚まだ釣れず

辞表書くただそれだけの筆を買う

絶筆になった穂先にある疲れ

このコート脱ぐとき母になるだろう

敵方もおんなじ策を練っている

落とし穴僕がはまると考えず

柿盛って山の辺人の居ない店

嫁さんが来たかそうかと山のバス

手切金姉が用意をしてくれる

電柱が少うし揺れている陽気

古里で柿盗人になってみる

校門を出ると一年生走る

(昭
61 |
63)

楊貴妃の炎は紫だと思ふ

果し状女が呉れて怖くなり

北へ行く男に荷物何もない

女ひとり送って岸に舟つなぐ

両方のカメラへ笑顔見せて立つ

軽トラで田舎迎えに来てくれる

森騒ぐ魔法使いが来たらしい

野仏の体温露が乾きかけ

みの虫も住居表示が欲しくなる

天つゆが届きしばらく待たされる

入園の日から目立っていることも

駐在の灯だけ明るい辻になり

半歩だけ先を歩いて肩を貸す

急ぎ足義母の命が保つように

暖房のある警察で待たされる

痛そうな顔で傷口見てあげる

猛獣の檻を出入りする雀

天井にいつもの蠅がいる安堵

お辞儀せぬ鹿が一頭山を見る

ポンポンと畳を踏んで敷き終る

また植木もろて大事にして枯らし

病人を笑わせ乍らリングゴむく

割箸を外人口で割っている

父親に好きな女がいるらしい

春の川赤い帽子が流れつく

今聞いた内緒がじつとしていない

パラポラアンテナが動く世界が動く

本店へ叱られに行く午後のバス

甲板にひとりの女冬の船

ひと芝居打つのにママの知恵も借り

主義主張通して渦の中に居る

落ちるなと責める手順を刑事読む

暇つぶしに来た釣竿がいそがしい

応対に出た少年の赤い頬

なんべんも名前が変わる長い川

生きてはりまつかそうかで事が済み

釣り銭が斜に落ちた冬の風

座布団の端に座って詫びを入れ

礼節のうるさい祖母がまだ達者

手間のいる奴だと親切心を出す

貨車一つ置き去りになる冬の駅

花のある切手で女の文が来る

帰郷する妻へひと言早よかえれ

古里へ来るとタニシが食べられる

追う影も曲ったままで出て来ない

仏飯を供え泣き言ばかり言う

迷て来た犬をこどもは飼うつもり

また折れる寺の廊下がよく光る

大事な話になって窓を開け

夕焼けの橋で女と別れよう

銀行の奥へ通れる顔になり

小遣いを呉れる話は忘れてる

来賓の位置に代理がみな並ぶ

底辺に住む人生も面白し

外は雪女一人でカード切る

おとがいが外れてますと冷やかされ

まさかと思うが妻が戻らない

粗朶くべて古老実のある話する

旅はいいなリングゴがいつぱい成っている

駅の名の町が離れたところにある

かたくなに方向音痴が来る喫茶

手鏡に写る夫がだらしない

人妻とお茶飲みました風みどり

写生する人あり秋が来ています

味噌汁の旨い民宿思い出す

盲導犬走ることなど考えず

旅に病みやさしき貫う国訛り

頬杖で表通りを見えています

入場料払いルールのまま歩く

借金のない貧乏に馴れている

線香がなかなかつかぬ墓の風

説明書使うたんびに読み直す

まだ若い遍路と出遭う奥秩父

でかんしよの踊りを抜けて会う女

おしゃべりな風だと露天風呂ひとり

出不精なくせに毎日髭を剃り

一本の傘を返しにぬかるみを

バリバリの浴衣で走る祭り笛

平凡なニュースを流す菊日和

ネクタイを結んでくれる女に逢う

まだ糸が通せる老母の座りだこ

変身をして来た妻が恐ろしい

駅裏のうまいコーヒと雑音と

熱が下って死にたいなどともう言わず

ゆっくりと今夜ふたりで飲むつもり

人間の匂いばかりで街暮れる

二階から仕草であかん言うている

人間不信だからしぶちんとも言われ

しぶちんの財布に折目ないお札

夢を編む窓はきれいな月明り

貝杓子豆腐の煮える音を聞く

病む母を明るい部屋に移しかえ

栗の皮ころげ焚火の跡がある

呆けたかな親父この頃怒らない

人の居る気配もしない萩の門

一城を落とし一城盗まれる

八十路まで生きた証の本を積む

靴下を丸めた部屋にある孤独

左遷地で迎えてくれたのが味方

不器用を売り物にして手伝わす

なめて来た相手にべかこしてやろう

天秤を妻とはかけぬことにする

寝たままで居られぬ人が来た見舞い

お見舞いが悔みにかわる門に立ち

みよちゃんとは結んで開いた草の笛

むらさきの旅路

旅の句帖から

日本よいところ

思いつけば旅

55年頃、新宮の大矢十郎さんから、みかん誌に思い出の旅の句でも出して欲しいとの要望があったので、丁度勤めた会社も辞め水客君とリュックを背に、一週間か十日間程行き当たりばつたりの旅をしていた頃なので、何とかなるだろうと簡単に引き受けた。

みかん誌の都合もあつたが、北の北海道から南の沖縄まで行きついたのには五年かかった。

つまらない句と文ではあるが、これによつて日本のよいところを少しでも知っていただければ幸いと自賛している。

〈北海道の巻〉

(利尻・礼文島)

利尻富士裾野は海へ突き抜ける

スコトン岬トドも日本の先で住む

利尻富士の美しさは海からの眺めが一番。

(稚内・宗谷岬)

ワツカナイ寒ざむ二人の歩が揃う

宗谷岬ここが日本の北の北

さよならと絶叫した交換嬢の声が聞えそう。

(天北原野)

牛一つ一つに邪魔もない原野

牛と牧草と、まっ直ぐな道だけの原野。

(網走・原生花園)

刑務所の塀も観光地にはいり

不毛の地に息づく花の根は強し

網走刑務所は、外から見るだけで宜しい。

(知床半島)

羅臼岳写して五湖は動かない

知床の鼻をまわれば風変わる

十七時になると熊が来るといふ知床五湖。

(ノサップ岬)

クナシリの灯がまぼろしの如く揺る

国後を知らぬ小学生の記が哀しい。

(摩周湖)

摩周湖は霧のベールのままでよし

カムイシユ島が小さく小さく浮く。

(層雲峡)

柱状節理滝も氷となって佇つ

車から見上げると首が痛くなる程つづく。

(天人峡温泉)

七段の滝羽衣になって散る

燃え残りの楓が孤独な旅人を包む。

(然別湖)

樹につらら然別の湖もの言わず

人の居ぬ遊覧船がボツンと浮いている。

(えりも岬)

百人浜索漠として風荒るる

風の強い日の襟裳は立たせてくれぬ。

(ニセコ高原)

笠雲に羊蹄山の高さ見る

初夏とは言え羊蹄山は雪を残している。

(昆布温泉)

高原の光もにぶい昆布の湯

何故か山にあつて昆布の湯と言う。

(積丹半島)

積丹の風は斜にきて楽し

日本海の碧が夢を拡げてくれる。

(白 老)

ポロトコタンアイヌの顔にある誇り

先住者という自信が夢を持つ。

(洞爺湖)

新山の煙りも洞爺景になる

奇しくも一カ月後有珠山が爆発した。

(函 館)

坂の道正教会は鐘が鳴る

教会が多い函館はエキゾチックである。

(松 前)

藩公歴代桜見守りて朽ちず

松前藩公の墓が移り変りを静かに見ている。

(江 差)

カモメ島ニシン戻らぬ浪ばかり

江差追分のみが永遠に生きるだろう。

〈東北の巻〉

(竜飛岬)

竜飛岬浪は津軽の風で飛ぶ

海を隔て眼の前に北海道が浮く本州の最果。

(青 森)

駅前で大きなリング買って喰べ

青森というリング、駅前にずらりと並ぶ。

(弘 前)

桜の葉落ちて古城に月明り

春の桜は有名、月明りもまた楽しい。

(岩 木 山)

津軽平野邪魔ものもなし岩木山

どこからでも見える信仰の山である。

(十二湖)

キャニオンをはずせば緑の池が待つ

日本キャニオンに近い十二湖は静か。

(秋 田)

道問うて秋田美人の訛り聞く

落と美人秋田はじっくり見たい街。

(男鹿半島)

なまはげと写し入道岬に佇つ

吸いこまれそうな日本海が拡がる。

(八甲田山)

魔の雪をかくし八甲田燃え残り

秋の八甲田には死の行進の恐ろしさはない。

(奥入瀬)

葉がぐれに奥入瀬秋の淵見せる

溪流の美は大町桂月ならずとも。

(十和田湖)

発荷峠十和田は秋の真つ盛り

幻の魚ヒメマスは生きていた。

(八幡平)

霧雨の八幡頂上人も居ず

吹きあげる霧は人を寄せつけない。

(ふけの湯)

ふけの湯の流れに若き娘の素足

子宝の湯と言われ、流れに解けこむ。

(後生掛温泉)

後生掛の地獄地鳴りに立たされる

泥湯は思わず散歩者をひるませる。

(玉川温泉)

立ち昇る湯気玉川はお湯どころ

湯量の豊かさはバスにまで湯気が届く。

(トロコノ湯)

けつたいな名やとトロコノのお湯を過ぎ

意味が判らないまま通り過ぎてしまった。

(黒湯温泉)

見下ろせば湯治の人が立つ黒湯

乳頭温泉郷中の秘湯湯滝の音がひびく。

(田沢湖)

田沢湖の深さに落とす駒ヶ岳

日本一深くて透明な湖は伝説を秘める。

(北山崎海岸)

断崖の肌で怒りの浪止める

遊覧船へ振る番屋からの手が頼母しい。

(竜泉洞)

地底湖の碧にいざなう音がする

深さ一二〇米の地底湖に謎がありそう。

(船越半島)

タブの木に風あり釣り舟まといつく

北限のタブの木が赤平金剛の浪を誘う。

(釜石大観音)

海にささやく観音さまのいいお顔

高さ四八米の大観音がまっ直ぐ海に向く。

(唐桑半島)

波割れて巨釜半造声になる

奇名の半島怒濤が松を騒がせる。

(金華山)

黄金産む島は小鹿の啼くところ

島の中腹にある萬金山神社参詣客も多い。

(牡鹿半島)

海が光りてコバルトライン碧に満つ

半島両側に見る入江に変化がある。

(松島)

それぞれに変わり松島海の色

今さら説明せずとも、松島は日本の美がある。

(鳴子溪谷)

鳴子溪枯葉は曲り淵に溜め

こけしの故里、鳴子温泉は賑やかだ。

(鬼頭温泉)

噴湯の美間欠泉に息をのむ

天に吹き上げる噴湯はすさまじい。

(最上川)

最上小唄川にひびいて舟下る

船頭の喉が川いっばいにこだまする。

(羽黒山)

杉木立羽黒は石の坂ばかり

山伏の踏む足音が力強くひびく。

(鶴岡)

致道館出羽の文化がひびきそう

しっとりとした城下町、竹刀を持つ子が走る。

(山寺)

山寺の蟬も鳴かずに秋暮るる

蟬塚も人の多きにとまどっているようだ。

(秋保大滝)

秋保大滝溪いっばいに落下する

楓に包まれた大滝は遠くまでしぶきが飛ぶ。

(蔵王)

蔵王いま樹氷に雪が吹き上り

蔵王のお釜は吹雪の中にあつた。

(裏磐梯)

五色沼裏磐梯は若き声

見る位置によって五色に輝く。

(若 松)

割腹へ嗚呼鶴ヶ城燃えていず

落城と見た若き戦士の血が滲む。

〈関東の巻〉

(伊豆大島)

三原山あんこの夢は椿追う

御神火が燃えると大島は恋の虜になる。

(大島波浮の港)

出船入船波浮は唄の出たところ

爆裂火口で出来た港、勝太郎節が聞えそう。

(八丈島)

八丈富士涙は流人か島の娘か

流人の島でありながら人なつこくて明るい。

(黄八丈)

黄八丈ひっそりと老婆織りつづけ

老婆が織る黄八丈と打つ太鼓が見事だ。

(甲子高原温泉)

岩風呂の広さ高原風ぎつし

原始林に包まれ、阿武隈川の源流にある湯。

(那須大丸温泉)

川の湯で声あり旅窓雨を聞く

湯が湧く川を挟んで旅宿が建つ。

(奥塩原)

蘇る木の葉化石の白が浮く

逆さ杉の近くに百万年前の化石層がある。

(川俣温泉)

溪底で湯気あり間欠泉らしく

時々、ゴーツと吹き上がる音がこだまする。

(鬼怒川温泉)

ホテル群立して断崖に唄落とす

近代ホテルが建ち並び、団体客がざわめく。

(日光)

神橋へつづく日光杉の蔭

東照宮で余りにも有名、観光客が絶えない。

(水戸)

もう梅がチラホラ偕楽園の道

黄門さまの水戸、好文亭の梅が美しい。

(霞ヶ浦)

ワカサギを釣るのか舟が動かない

土浦から見る霞ヶ浦は影絵のようである。

(潮 来)

舟と舟すれすれ過ぎる十二橋

女船頭とアヤメ、水郷潮来は唄になる。

(鹿島、香取神宮)

鹿島香取武將の願いこめてある

両神宮とも武神、莊嚴さが森にただよう。

(成 田)

雑念をお不動さんが解いてくれ

ズラリ並ぶ土産物店が成田の人氣を物語る。

(安房小湊)

鯛見れぬ日の小湊は浪が飛ぶ

日蓮の誕生地手を叩けば寄ってくる鯛。

(おせんころがし)

断崖の果てへ転んだ恋の風

村娘おせんの悲恋が急坂に涙が残る。

(檜 枝 岐)

間引きした子供が泣くか稚児地蔵

そつとたたずむ湯宿、檜枝岐に秘話残す。

(尾 瀬)

草紅葉尾瀬の池塘を冷たくす

水芭蕉と濡れた板歩道、若者に触れる尾瀬。

(水上温泉)

水上へ来て明日の旅程考える

冬も夏も基地となる水上は利根の上流。

(宝川温泉)

露天風呂四つ巡って熊に逢う

大きな露天風呂、湯浴みする熊が居る。

(法師温泉)

熱い湯とぬるい湯仕切っている丸太

湯板の上で湯浴客がゆったり寝転ぶ。

(四万温泉)

つぶれかけた岩風呂もよしひとりきり

奥四万は如何にも湯治湯という感じ。

(鋸 山)

百尺観音鋸山を深くする

全山が岩山で十州が見えるという鋸山。

(鎌 倉)

栄枯盛衰鎌倉一朝にしてならず

一日で廻れない程、歴史の多い歩く町。

(東 京)

まっ先に二重橋へと来るガイド

議事堂に我が一票も置いてある

もう銀座柳は昔のことになり
ファッションに踊らされてる六本木
新宿で夜の虜にされてくる

兎も角も西郷さんと撮る上野
浅草は一寸五分の有難さ

泉岳寺香の匂いも絶えぬまま
寅さんに逢えず柴又団子買う

さすが東京、日本の首都全国の人が集まる。

△甲信越の巻▽

(甲 府)

水晶とぶどう武田は生きている

信玄の血は今も脈々と流れている甲府。

(積翠寺温泉)

信玄の産湯要害山に湧く

ひっそりとした味わいのある古湯。

(昇仙峡)

覚円峰溪の流れを深くして

四キ口の溪谷は四季を通じて美しい。

(夜叉神峠)

彩づいて夜叉神峠風が舞う

峠を越えると白鳳溪谷が秋を誘う。

(西山温泉)

恥じらいもなく混浴の笑いあり

奈良田へつづく温泉郷は家康の隠れ湯。

(身延山)

石段を見上げ遠廻りする身延

菩提梯という石段の一つ一つが高い。

(天竜川)

天竜のしぶきに揺れる岩つつじ

唐笠を着た舟人へ橋上から声が飛ぶ。

(飯 田)

伊那谷の風を集めている飯田

リング並木が飯田の街のシンボルである。

(駒ヶ根)

駒ヶ根高原深ぶか山の高さ知る

アルプスの山々はまだまだ高い。

(高 遠)

コヒガン桜絵馬の歴史を知らぬまま

城址いっばいに咲く桜は見事である。

(小 諸)

来て見れば小諸城址は蟬時雨

千曲川と共に藤村の詩情が溢れている。

(木曾谷)

ヒノキサワラ木挽きの音が今日もする

木曾といえは檜、森林列車が登る。

(松本)

鉄砲狭間北アルプスは目のあたり

若者が集まる松本、登山の基地は賑やか。

(上高地)

若者が声張り上げる河童橋

穂高連峰と梓川、自然がいっぱい。

(安曇野)

流水の冷たさ緑のワサビ園

碌山美術館は是非、見て来たい所。

(千国街道)

残雪がまだ邪魔をする塩の道

百観音も寒さにちぢこまっていた。

(諏訪湖)

大花火諏訪の浮城閣に浮く

上、下と温泉を持つ諏訪湖は広い。

(清里高原)

牧牛と顔突き合わす草の春

八ッ岳山麓、高原のムードが漂う。

(軽井沢)

軽井沢若い女性と突き当り

緑に包まれた軽井沢にファッションを見る。

(浅間)

溶岩のあばたの中に光り苔

鬼押しの奇岩は月の肌を見るようだ。

(別所温泉)

女湯へ誘う声のする別所

北向観音は明るくて参詣者が多い。

(長野)

信仰のかたまりという長野

門前町の賑いが都になった長野。

(野沢温泉)

野沢菜を洗う女へかがみこみ

湯宿が軒を並べ、独得の雰囲気を持つ。

(志賀高原)

複雑な地形にリフト入り交り

丸池、発哺、熊ノ湯とパラエティに富む。

(十日町)

幻の火が雪城を着にする

織物の町、雪祭りは札幌に次ぐ。

(小千谷)

いざり機小千谷縮は雪を知る

縮を織る音が信濃川を這う。

(長岡)

雪積んで積んでガングの道つづく

消雪パイプが道の真ん中を走る。

(瓢湖)

白鳥が来て五頭連峰雪に浮く

白鳥の渡来地、人間との絆が濃い。

(弥彦神社)

神前に座して雪落つ音を聞く

弥彦山に登ると遠く佐渡が見える。

(新潟)

新潟の慕情朝市から明ける

新潟美人を探し求めるのも旅である。

(両津)

もう佐渡へ来たなと思う両津港

佐渡の玄関口、おけさ節が迎えてくれる。

(佐渡金山)

水したる流人の墓に光る苔

流人哀史、金に明け金に暮れた日々。

(相川)

相川でおけさ踊に誘われる

盛時が偲ばれる相川音頭も有名。

(尖閣湾)

峽湾美松のみどりが崖を這う

小っちゃな遊覧船が彩りを添える。

(外海府)

荒浪に堪えて突き出る二ツ亀

二ツ亀の奇勝、釣り人が憩う姿も見える。

(小木)

タライ舟どうしでカメラ向ける小木

島の乙女が漕ぐタライ舟は情緒がある。

△富士箱根と伊豆東海の巻▽

(富士)

紅富士へ乙女峠はまともなり

富士は何処から見ても美しい。

(山中湖)

若者に負けず漕ぎ出る山中湖

とに角楽しい湖、冬のスケートも結構。

(河口湖)

逆さ富士湖畔は歌のあるところ

五湖中二番目の大きさを賑やかである。

(精進湖)

精進湖出ると招いている樹海

スイスの湖に似ているといわれている。

(白糸の滝)

さわやかに白糸の滝袖ぬらす

数千条の糸は陽に映えると美しい。

(湯本)

湯本の湯ここから箱根坂になる

箱根の玄関口、出合の川が冷たい。

(大涌谷)

踏み込めば大涌谷は地獄絵図

硫黄の噴出がロープウェイから見られる。

(芦ノ湖)

雨降る芦ノ湖静かなままでよし

名物の海賊船が動く芦ノ湖は絵になる。

(箱根関所跡)

関所跡通行手形も売っている

昔、旅人を泣かせた関所も今は観光地。

(旧街道)

石畳千仞の谷もぬれている

箱根八里のきつい坂、馬子唄は聞えない。

(伊豆)

星月夜伊豆は豊かなお湯を溜め

一歩伊豆に入ると湯の匂いがする。

(熱海温泉)

開発がお宮の松を悲しませ

東洋のナポリ熱海は賑やかになり過ぎた。

(蓮台寺温泉)

宿へ来た女と酌んだ蓮台寺

蓮台寺の夜は静かで情緒がある。

(爪木崎)

水仙の匂いの中で打つ太鼓

水仙が咲揃うと、若者達の太鼓が浪に轟く。

(下田)

伊豆下田お吉の涙で濡れるとこ

伊豆観光のメッカ、寝姿山がまず眼に入る。

(了仙寺)

了仙寺何かを期待して詣り

セックスコレクションで有名になった寺。

(石廊崎)

灯台の白に負けじと浪割れる

突端にある小さな祠から見る景色は抜群。

(伊 東)

大島へ風の便りを出す伊東

伊豆の入口、観光バスが来ては過ぎる。

(熱川温泉)

湯煙の中で熱川ワニを飼う

至る所で湯煙を上げる熱川、湯量も多い。

(修善寺温泉)

修善寺の歴史に残る独鈷の湯

源頼家の悲話と共に修善寺の歴史がある。

(天 城 峠)

急坂へ踊り子達の息づかい

伊豆の踊り子で有名な天城、杉木立が深い。

(河津七滝)

穴湯から滝の落下を聞かされる

大滝の裏にひそむ穴湯、露天風呂も多い。

(堂ヶ島)

海は晴 天窓洞に浮かぶ舟

洞窟の中に天窓があり、舟から空が見える。

(三津港)

三津浜の海の向うは富士の山

駿河湾を越え、ともに富士が見える。

(三 島)

三島から農兵節が飛び出そう

ノーエー節を唄う女郎衆はもういない。

(東 海 道)

行列が来そう東海道に松

ところどころに残る松並木で往時を偲ぶ。

(日 本 平)

茶島の緑と駿河湾の碧

日本平の眺望は美しい、東照宮もほど近い。

(三保ノ松原)

松ばかり泣いて天女は戻らない

羽衣の松も年と共に衰えて来たようだ。

(御 前 崎)

一望千里遠州灘は真帆白帆

遠州灘に突出た砂丘の岬、視野は広い。

(寸又峡温泉)

寸又峡夢の吊り橋声が飛ぶ

山ふところに抱かれた静かな温泉。

(静岡)

静岡は茶どころ一服差し出され

駅弁と共に売つてゐるお茶がうまい。

(鳳来山)

参道の老杉背に迫つて来

杉木立の坂道が長々とつづく。

(浜名湖)

みずうみが箱庭になる館山寺

浜名湖と言えば鰻、養鰻場が眼につく。

(名古屋)

キシメンにのつたカツオが少し散り

しゃちほこの金が眼にしむ名古屋城

玉砂利の音ばかりする熱田宮

夏あつく冬は寒いという名古屋

信長、秀吉、清正と武将が生まれ育つた都。

(岐阜 阜)

篝火へ鶴匠の手網ピンと張る

岐阜と言えば、鶴飼と提灯で有名。

(日本ライン)

ライン下り犬山城が小さく浮く

冬のライン下りも又格別。

△北陸と飛騨、美濃の巻▽

(戸隠高原)

戸隠の坂は修験の道と知る

宿坊に泊ると修験者の荒い息が聞えそう。

(黒姫高原)

黒姫で一茶と遊ぶ雀の子

山麓は小林一茶が生まれ育つたところ。

(妙高高原)

ゲレンデも春は花咲くなだらかさ

遠くに見える野尻湖、広々としている。

(燕温泉)

湯のけむり抜けて飛び交う岩つばめ

近くに川風呂と美しい滝がある。

(黒四ダム)

音だけで黒四ダムは霧ばかり

雨の黒四はバス、ケーブルと疲れさせる。

(立山)

立山の雪をバスから見て廻り

万年雪が眼を射るように光る。

(黒部峡谷)

絵に描けばお伽の国になる黒部

トロッコ列車は山峡の美を見せてくれる。

(宇奈月温泉)

黒部から戻って入る湯の香り

山に囲まれた宇奈月の月が美しい。

(富山)

富山から薬土産に買うて来る

街のどこからでも立山連峰が見える。

(飛騨古川)

白壁の影を崩して鯉群れる

格子造りと白壁は、古川を落ち着かせる。

(高山)

若者も好んで歩く三之町

ブラリ来て一刀彫りに魅せられる

朝市を浴衣から上げて見て廻り

高山は観る、聞く、味わう飛騨の小京都。

(奥飛騨)

新穂高紅葉が迫る露天風呂

ロープウェイから見る穂高はまた格別。

(平湯温泉)

大滝も間近平湯へ溜る客

明日は乗鞍か上高地へつなぐ客が多い。

(乗鞍岳)

空は青し乗鞍雲の中に立つ

ここまで昇ると、一枚重ねたくなる程寒い。

(上高地)

若者の声がこだます梓川

大正池に写る焼岳が景になる。

(濁河温泉)

噴火した騒ぎの中の露天風呂

御岳の噴火をまともに見た日本一高い湯。

(下呂温泉)

遊客の唄も流して益田川

名古屋の奥座敷、団体客で賑う。

(郡上八幡)

歌声のない八幡は静かすぎ

郡上踊りで有名な城下町。

(白川郷)

合掌風呂越中おわら聞きながら

秘境中の秘境も、今は簡単に車で行ける。

(五箇山)

合掌の雪解けを聞く流刑小屋

白川郷へつづく合掌部落。

(大牧温泉)

湯の宿で魚釣る部屋へ紅葉散る

庄川峡の片ほとり、湯宿から魚が釣れる。

(越前大野)

御清水の冷たさ女菜を洗う

静かな盆地にある城下町。

(和倉温泉)

能登和倉御陣乗太鼓風に舞う

能登一の温泉地、句碑と歌碑も多い。

(恋路海岸)

恋悲しあたら若さを海に捨て

悲恋の海岸は若き男女の像が建つ。

(時国家)

落ちのびて栄華の昔ふと思う

平時忠の五男、時国が隠れ住んだ屋根。

(輪島)

輪島塗り優美な彩に眼をひかれ

奥能登の中心地、朝市も賑う。

(能登金剛)

巖門の浸食波の叫び聞く

荒浪と闘う能登金剛は男性的な景。

(千里浜)

砂浜にわだちが消えぬ千里浜

よくロケーションに使われる長い海岸。

(金沢)

雪吊りの松も兼六園の景

金沢をぶらり歩いて武家屋敷

香林坊百万石の賑やかさ

言わずと知れた加賀前田侯の城下町。

(安宅の関)

弁慶の涙安宅の松が見た

勸進帳そのままの像が松林に建つ。

(粟津温泉)

静かさとき古き粟津は加賀のお湯

落ち着いた温泉情緒に歴史がある。

(片山津温泉)

湯の風も爽やかに吹く柴山湖

明るい温泉地は観光客を楽しませる。

(山中、山代温泉)

山中と山代どっちも加賀のお湯

両方共余りにも有名、湯客が絶えない。

(東尋坊)

断崖へ日本海の波が飛ぶ

奇勝、上から見ても下から見ても絶景だ。

(永平寺)

永平寺修業の僧の息白く

曹洞宗の総本山、老杉の中に規律がある。

(福井)

勝家もお市の方も居た福井

落城の昔はさておき、今は織物の都。

〈北近畿の巻〉

(敦賀)

大陸へ想いは遠し浜の風

赤松が群生する気比の松原は昔を残す。

(三方五湖)

それぞれの魚が住んで三方五湖

梅丈岳からの景は三百六十度ひろがる。

(常神半島)

北限のソテツ孤独なひとり言

陸の孤島常神は家並が崖にへばりつく。

(蘇洞門)

洞門の向うは荒い荒い海

遊覧船が碎ける浪にもてあそばれる。

(小浜)

湾ひろく若狭の海はいま入り陽

小浜は玄白・雲濱が出たところ。

(舞鶴)

舞鶴の港は涙溜めている

岸壁の母の姿はもう見られない。

(宮津)

ちりめんを織る音どこかでする宮津

昔は縞の財布が空になったところ。

(天の橋立)

逆さまに見え橋立は雪の景

ここでは恥じらいもなく、股からのぞく。

(丹後半島)

舟屋いま静まりかえる伊根の夜

ブリ漁が済むと伊根の港は本当に静か。

(賤ヶ岳)

賤ヶ岳北と南の風が呼ぶ

余吾の湖はひそかに七本槍の昔を偲ぶ。

(琵琶湖)

びわこいま波も立てずに暮れかかる

琵琶湖はとに角広く、何処からでも絵になる。

(海津大崎)

奥びわ湖海津大崎咲き競う

湖畔の道路に見事な桜並木がつづく。

(竹生島)

船降りたところから詠歌つづく坂

ポツカリ琵琶湖に浮かぶ小島。

(長浜)

秀吉もねねも長浜からの夢

曳山の子供歌舞伎と盆梅は是非見たい所。

(彦根)

江戸城も映画は彦根城で撮り

井伊直弼の埋木舎はひっそりしている。

(醒ヶ井)

雪解けの水に醒ヶ井鱒はねる

鱒ならなんでもという養鱒場。

(永源寺)

溪流を染め永源寺秋深く

湖東の禪寺、紅葉の時は観光客で賑う。

(近江八幡)

殺生関白夢ははかなく湖光る

八幡城は村雲御所として美しい尼僧が住む。

(安土)

ハラハラとただ落葉する安土城

信長の野望もむなしく石畳だけ残る。

(信楽)

雄狸に交り雌狸寝てござる

陶器の里、まず狸の置物から眼に入る。

(石山寺)

源氏の間月も湖面から映える

紫式部がここで書いた源氏物語は不滅。

(大津)

びわ湖への船出大津は春を待つ

鮒ずし、若鮎の飴煮等の店が軒を並べる。

(三井寺)

集印の墨も乾かず三井の鐘

三井寺から見える湖面は絵のように美しい。

〈京の巻〉

(京の風情)

休み茶屋三年坂は今日も雨

涼み床加茂の流れに写る月

祇園街舞妓の帯を追うカメラ

京にはいろんな風情があり、旅人を慰める。

(周山)

北朝のみかどを誘う桜花

常照皇寺の九重桜は有名。

(北山)

雪が舞い北山杉を磨く寡婦

かじかむ手で磨かれる北山丸太は美しい。

(高雄)

くれないが清滝川を染めて秋

高雄を含めた三尾の紅葉はきれいだである。

(嵯峨野)

若者がとりこになっていた嵯峨野

竹林の音もきれいな直指庵

落柿舎の風情を残すみのと笠

ゆっくりと歩けば嵯峨野は見る所が多い。

(嵐山)

嵐山絵になるように山があり

春夏秋冬それぞれの景を見せてくれる。

(苔寺)

苔寺でカメラを持って苔を踏む

苔寺も簡単に入れなくなった。

(比叡山)

西に京東にびわ湖見る比叡

叡山は京都の屋根である。

(大原寂光院)

鹿啼くか建礼門院美しく

大原女と平家物語のロマンを追うところ。

(鞍馬寺)

義経の修業の音が天狗杉

火祭りの時は、大変な賑いを見せる。

(光悦寺)

茶席まで光悦垣の美しさ

昔は京の市中がよく見えた草庵。

(金閣寺)

義満の贅を見て来た金閣寺

修学旅行と外人の観光客が絶えない。

(修学院離宮)

みやびさとみどりの中にある茶亭

日本の美が追求出来るが、普通では入れない。

(詩仙堂)

刈込みのつつじがきれい鹿おどし

中国の詩人の像があり、静かな庭はまた格別。

(銀閣寺)

盛り上げた砂がきれいな銀閣寺

金閣に負けじと義政が作った美。

(哲学の道)

疏水端静かなままにそぞろ行く

本を片手に歩いた学生達は。

(大徳寺)

禅寺の伽藍一休さんが始祖

裏へ廻ると昔ながらのあぶり餅の店がある。

(北野天満宮)

能筆を頼む天神さんの梅

梅花祭の時は特に賑う。

(賀茂神社)

賀茂神社葵祭りの列が出る

上と下の社があり、朱が美しい。

(南禅寺)

楼門を先ず見上げとく南禅寺

五右衛門が見た絶景も今は。

(京都御所)

紫宸殿左近の桜散りかかる

七百年、天皇さまがおわしました所。

(平安神宮)

平安の都を偲ぶ大極殿

桓武天皇を祀る。庭園の桜が美しい。

(二条城)

外人のカメラと出合う二条城

この梅と桜も見事である。

(知恩院)

忘れ傘誰かが杖で指して見せ

甚五郎の忘れ傘と驚張りで知られている。

(円山公園)

夜桜の公園で聞く京なまり

祇園さんといわれる八坂神社も近い。

(清水寺)

清水の舞台で京を垣間見る

良慶師今は亡く音羽の滝は絶えない。

(二十三間堂)

通し矢の音がしそうな堂の外

本堂に五百体の観音像が安置されている。

(島原)

おいらんにゆっくり煙管差し出され

昔のままの衣装で観光客に見せる。

(東福寺)

東福寺通天橋はいま紅葉

楓に包まれた通天橋は一幅の画。

(東寺)

京都やな東寺の塔が見えはじめ

お大師さんの日に出るガラクタ市は見もの。

(伏見稲荷)

赤鳥居おいなりさんへ手を合せ

三大稲荷の一つ、雀の焼鳥屋がある。

(醍醐寺)

秀吉もねねも並んで見た桜

五大力さんと言われ、上醍醐への坂はきつい。

(宇治)

宇治川の早瀬平等院も春

扇の芝には源三位頼政の涙が溜る。

(花の寺)

桜にさそわれて来る花の寺

大原野の春は賞でる人で混む。

(京の味)

八ッ橋を母の土産に買うて去に

湯豆腐も京の匂いに包まれる

ひと切れの千枚漬に見せる味

京には捨て難い味が沢山ある。

〈大阪と神戸の巻〉

(能勢妙見)

妙見の太鼓しじまをこだまする

妙見さんで知られる日蓮宗のお寺。

(箕面公園)

滝しぶき楓は四季の彩を見せ

滝と溪と猿、箕面は手頃な行楽地。

(万博公園)

年ごとに緑を増して庭静か

日本庭園はゆっくり散策したいところ。

(服部緑地)

若い血のなかで合掌動かない

運動施設の中にある合掌造りが美しい。

(淀川)

淀川も秋なり川面霞揺るる

三十石舟が往来した川も舟の影がない。

(枚方)

枚方に郷愁がありくらわんか

今はひらかた菊人形で人を集めている。

(梅田三番街)

地下街に川あり老舗並ぶとこ

ファッションの店食欲をそそる店が一ぱい。

(中之島)

中之島恋が芽生える昼休み

川に挟まれた中之島、昔からデートの好適地。

(桜の宮)

春やよし造幣局の通り抜け

桜も見事だが、造幣局泉布観等建物も古い。

(天満天神)

新地から天神さんに願いごと

七月の天神祭には大阪人の意気込みをかける。

(大阪城)

石垣の大きさと閣さん徳ぶ

今年四百年祭を迎えるシンボル大阪城。

(船場)

荷を開ける音から船場明けはじめ

いとほんと丁稚、大阪は商人の街。

(千日前)

法善寺水かけ不動へ下駄の音

利久下駄で詣る女の姿に浪速情緒がある。

(道頓堀)

芝居小屋出るとまむしを食べに行き

様相を変えても道頓堀は五座から明ける。

(四天王寺)

天王寺鐘を聞きつつ亀眠る

天王寺さんで親生まれ、聖徳太子が建立。

(通天閣)

三吉も駒を休めた通天閣

ジャンジャン横丁には庶民の匂いがある。

(生駒)

ケーブルを出ると聖天は石の坂

聖天さんで知られ、信仰の人が絶えない。

(信貴山)

信貴山で張子の虎を買ってくる

本堂床下の戒壇めぐりには靈氣を感じる。

(塚)

自由都市塚は利休生むところ

外人もびつくりハラキリした塚

妙国寺ソテツの高さ意識する

塚から鉄砲鍛冶の音がする

大きさは世界一なり仁徳陵

貿易の港、塚、旧さの中に新しさを見せる。

(宝 塚)

青春がはちきれそうなツカの町

温泉と歌劇で世界に知られるタカラヅカ。

(有馬温泉)

秀吉もねねも遊んだ有馬の湯

古い湯治場、赤い泥湯と坊のつく宿が多い。

(灘)

灘五郷今日も聞える杜氏の唄

宮水は美味しい灘の酒を育てた。

(六甲山)

ホテルでのデイナー百万ドルの景

外人が開発した六甲山、夜景が美しい。

(三 宮)

ファッションがサンチカタウン闊歩する

今や神戸を代表する繁華街。

(ポートアイランド)

ポートライナー人工島の上に行く

人工で造った島は神戸港を変えつつある。

(神戸港)

神戸港外国船が屯する

小さな遊覧船が異国の船を抜けて走る。

(異人館)

風見鶏異人館通りの風を見る

若者に人気のある異人館通りは坂ばかり。

(須磨の浦)

敦盛に想いを残す須磨の海

須磨寺には、敦盛が愛した笛がある。

△大和の巻▽

(奈 良)

鹿が居て三笠の山は春霞

松明が映え二月堂春を呼ぶ

大仏の高さを仰ぐ東大寺

大仏さまと鹿、古都奈良は歩いて観る所。

(柳生の里)

笠置まで柳生の里は剣の道

剣豪達の高笑いが聞えそうな柳生街道。

(唐招提寺)

天平の薨が南大門の夢

映画にもなった開祖鑑真和上の教えは不滅。

(薬師寺)

水煙の美しさ見せる東の塔

最近西塔も出来、薬師寺も落ち着きを見せる。

(矢田寺)

あじさいの彩にかくれたかたつむり

あじさい寺で名高い地藏さまをまつる。

(法隆寺)

松並木通し鐘聞く法隆寺

聖徳太子の創建、見るべき建築が多い。

(斑鳩の里)

たたずめば斑鳩の里静かなり

風格のある家が多く、静かな丘陵の佇い。

(当麻寺)

霜困いとれてボタンは花を待つ

石光寺と共に中将姫伝説の寺。

(大和郡山)

郡山 金魚の池と城下町

大和大納言豊臣秀長が創った城下町。

(天理)

ハッピー着た信者天理の街らしく

天理教の本部、宏大で清潔さがある。

(山の辺の道)

山の辺の楽しさ無人で柿を売る

のんびりと歩くと古代に戻ったようで楽しい。

(橿原神宮)

玉砂利の音も神宮リズム持つ

初詣や建国祭の人数は多い。神武天皇を祀る。

(長谷寺)

登廊もボタンで埋まる長谷の寺

門前町は店と宿で賑う。泊れば面白い所。

(大野寺)

川越えに桜と浮かぶ磨崖仏

道と川を隔てて見る磨崖仏は素晴らしい。

(室生寺)

しゃくなげと紅葉きれいなよるい坂

室生寺の五重の塔は小さくて可憐である。

(多武峰)

紅葉が五重の塔と朱を競う

鎌足を祀った談山神社、杉木立の中に建つ。

(石舞台古墳)

石舞台秋の陽射しに立てる人

蘇我入鹿の墓と伝えられる。

(飛鳥路)

飛鳥路やどこもかしこも古代なり

古い歴史書を繙くと飛鳥を歩きたくなる。

(壺坂寺)

沢市の腫を開く靈驗記

お里の純情が靈驗を生んだ。大観音がある。

(吉野山)

落下する桜も涙吉野山

桜と言えば吉野と言われる程桜が多い。

(伊賀上野)

静かさよ みの虫庵に苔がむす

伊賀上野は芭蕉と忍者で知られる。

〈南紀と志摩の巻〉

(加 太)

加太碧し遠く近くに友ヶ島

紀淡海峡に浮かぶ友ヶ島は絵になる。

(和歌山)

御三家のお城で聞いた手毬唄

新和歌で波音を聞く宿で寝る

玉津島塩がまさんも歌ごよみ

紀州侯の城下町、ブラクリ丁も楽しい。

(紀三井寺)

紀三井寺一番先に春が来る

ここの桜が咲くと関西はもう春だ。

(根来寺)

秀吉も一目置いた根来衆

根来は雑賀とともに僧兵が屯した所。

(有 田)

お江戸へもここから積んだみかん船

有田と言えばみかん、紀文でお馴染み。

(道成寺)

道成寺恋の炎が燃えに燃え

安珍清姫の説話を面白く語る和尚が楽しい。

(日ノ岬)

日の岬ひそりアメリカ村がある

煙樹ヶ浜を抜けると日の岬灯台は間近。

(南部梅林)

もう春の報らせ南部に梅匂う

石神梅林とともに一目十万本と言われる。

(白 浜)

関西に来て白浜の湯に浸る

関西の奥座敷、大昔は牟婁の湯と言われた。

(奇 絶 峽)

奇絶峽人影もなく摩崖仏

不動の滝が飛び散り、桜の彩を増す。

(竜神温泉)

秋も去ぬひそり竜神 湯が溢れ

上御殿、下御殿と名乗る宿も奥床しい。

(高野山)

老杉の高野は聖おわすところ

奥の院への道は老樹と諸大名の墓がつづく。

(九度山)

復帰する日を待ち編んだ真田紐

幸村父子が隠棲した所、抜穴がある。

(串 本)

大島は目の前串本灯がともる

民謡にも唄われた海中公園がある。

(橋杭岩)

橋杭岩蟹が一匹這い上り

橋脚がこわれたような奇岩が海の中へつづく。

(太 地)

熊野灘太地は鯨が泳ぐところ

捕鯨の基地、鯨のことならなんでも。

(勝浦温泉)

洞窟のお湯で太平洋を見る

白浜と並ぶ温泉郷、紀の松島は美しい。

(那智の滝)

那智に来て滝の高さと杉木立

西国札所一番の霊場は参詣客が絶えない。

(新 宮)

浮島のふうわりとした朝の街

熊野川を挟んで三重県に接する要所。

(澗 峽)

雪空が流れに落ちて船速やむ

春夏秋冬、趣を変えてジェット船が走る。

(湯峯温泉)

七色に変わり美人をつくるお湯

壺湯といわれる小屋掛の浴場もうれしい。

(熊野本宮)

熊野路の終り本宮まで詣り

熊野三山の中心、昔から皇室の信仰が厚い。

(十津川)

十津川で野猿に乗ってみたくなり

秘境十津川に野猿という吊籠で溪を渡る。

(谷瀬大吊橋)

吊り橋の揺れも大きい谷瀬の溪

最長の吊橋、バスも停車して見物させる。

(鬼ヶ城)

鬼ヶ城太平洋を噛むように

獅子に似た岩その他が林立し、奇景を見せる。

(五ヶ所湾)

鰯と蟹五ヶ所の宿は磯の風

リアル式入江が美しい静かな漁港。

(合飲の郷)

若者とサイクリングするも合飲

宏大な敷地と設備は若者の血を沸かす。

(和具)

たくましい海女と出会った和具の浜

本場の海女を見に来る人が多い。

(大王崎)

灯台に守られ波切海に生く

遠州灘と熊野灘を分ける灯台が立つ。

(鳥羽)

鳥羽に来て真珠を一つ買わされる

真珠と鳥羽は切り離せない程有名。

(答志島)

海に明け海に暮れ行く答志島

鳥羽湾随一の島、九鬼水軍の墓がある。

(二見浦)

絵になって旭日が昇る夫婦岩

余りにも有名だが、周辺が俗化して来た。

(伊勢神宮)

内宮へ心も洗う五十鈴川

昔から一生に一度はお参りしたお伊勢さん。

(松阪)

三井家が出た松阪は肉の街

牛肉もさる事ながら氏郷が育てた古い城下。

〈山陰の巻〉

(出 石)

登城する足音を聞く辰鼓櫓

白磁の焼物と皿そば、出石は静かな城下町。

(城崎温泉)

一の湯で旧知と出逢う宿の下駄

セツの外湯はそれぞれ特徴をもつ。

(玄武洞)

柱状節理今にも洞窟くずれそう

円山川に霧がかかると玄武洞幽幻になる。

(日和山公園)

投げ銭を追う海女にある白い衣

日本海の碧へ溶けこむ娯楽設備が整う。

(湯村温泉)

話す間に玉子がゆでていた湯村

高温の湯が沸くので有名、湯煙が溢れる。

(香住海岸)

海は碧波はまっ白岩砕く

冬は松葉蟹でこの地一帯が賑う。

(余部鉄橋)

鉄橋の真下は小さき小さき村

日本一高い鉄橋、近くに平家部落がある。

(鳥取砂丘)

風紋が崩れて砂丘風変わる

ラクダが一頭夕陽を浴びる姿は美しい。

(白兔海岸)

砂浜でむかしの唄を口ずさむ

“大きな袋を肩にかけ”の歌碑がある。

(鹿野温泉)

美しい月を賞でつつ露天風呂

川柳の町にしたいという新興温泉。

(三朝温泉)

ざわめきも程よし三朝夜の明り

ラジウムが多い湯、川中の風呂もよい。

(奥津温泉)

山峡の風こちよし奥津の湯

足踏み洗濯で名が知られる。

(湯原温泉)

蒜山を抜ければ匂うてくる湯原

ダムの真下に温泉街が広がる。

(蒜山高原)

ゆったりと牛が草食むさわやかさ

ひろがる高原は若者に人気がある。

(大山)

山陰へ来たなと思う伯耆富士

中腹に大山寺があり、観光客が絶えない。

(皆生温泉)

団体が来て賑やかな夜の皆生

米子の奥座敷、便利がよくて賑いを見せる。

(清水寺)

はらはらと落花清水古さもつ

京よりも古いといわれ、精進料理が旨い。

(足立美術館)

借景の広さに負けぬ美術館

近代日本画を展示、雄大な借景も見事。

(美保ヶ関)

唄ほどでない松がある美保ヶ関

ここから見る大山の夕焼けは素晴らしい。

(松江)

城山の桜に映える天守閣

八雲立つ風土記に神話満ちに満ち

残照を松江大橋見て渡る

松江は名所旧蹟が多く、神話の郷である。

(宍道湖)

夕陽いま宍道湖赫にして沈む

春夏秋冬を問わず美しい。姫島は可憐。

(玉造温泉)

観光の疲れを癒やす玉造

いい宿と瑤瑤を売る店が多い。

(海潮温泉)

首だけを出して螢火追う海潮

静かな山湯で自然美の露天風呂がある。

(木次)

斐伊川の春は見事な土堤桜

川柳も盛んな木次は山の町。

(出雲湯村温泉)

静かさや湯村の風呂は岩を積む

湯治場の面影が残り古い湯宿がある。

(鬼の舌震)

無気味さに鬼も驚く舌震

花崗岩の侵食が恐しいまでの美を創る。

(峯 寺)

眼の下は木次峯寺は山の中

鐘楼横の白木蓮が素晴らしい。修験道場。

(立久恵峽)

奇岩直立して吊橋ゆるがせる

遊歩道に五百羅漢と薬師寺がある。

(出雲大社)

いい縁をいただく両手合わせとく

言わずと知れた縁結びの神様。

(日御崎海岸)

句碑もよし日本海の波光る

尼緑之助氏の句碑が日本海に向かって建つ。

(三瓶山)

温泉を秘めて三瓶の山燃える

大山に次ぐ山陰の名山、登山客も多い。

(石見銀山)

悲しみを落して間歩の露走る

銀山が閉鎖して間歩(坑道)が怪しい。

(豊ヶ浦)

岩床の畳ヶ浦に遊ぶ波

地震で海底の岩床が隆起、浜田から近い。

(有福温泉)

ちっぽけな湯宿に旅情もつ女

離壇のように並んだ宿、情緒も豊かである。

(津和野)

朝霧や乙女峠にある折り

鯉泳ぐ津和野は若い人の群れ

ここだけは稲成と書いた太鼓骨

小京都、津和野は印象深い町である。

(萩)

ほのぼのと明治を開く萩やよし

維新の英傑が輩出した萩、旧居も多い。

(隠岐の島)

島前島後隠岐は流人の声がする

摩天涯霧はかぶさるように落つ

白鳥の浜は白さと松の青

悲話の数々をためた隠岐は遠くて近い。

△山陽と内海の巻▽

(姫 路)

浮彫りがきれいな夜の白鷺城

近代都市姫路のシンボルはやはり白鷺城。

(竜 野)

朝夕にメロデイを聞く赤とんぼ

醬油と素麵の町竜野は詩が溢れる。

(室ノ津)

室ノ津で線香代のいわれ聞く

遊女友君の説話も悲しく古い港町。

(赤 穂)

早打ちの駕籠が来そうな赤穂城

義士の町赤穂、今は塩田もない。

(牛 窓)

夢二画く宵待草にあこがれる

牛窓は竹久夢二が清楚として残る。

(湯ノ郷)

湯の郷で昔馴染と湯に浸り

作州津山に程近い静かな温泉町。

(弓 削)

弓削へ来て句座も楽しいものとなり

川柳の町弓削に路郎句碑が光る。

(高 梁)

高梁のそぞろ歩きと武家屋敷

古い町並と土塀、高梁に郷愁がある。

(岡 山)

黒塗りの烏城が見える後樂園

岡山は緑の街、マスカットと白桃がよい。

(倉 敷)

白壁と柳倉敷はギャルの町

大原美術館ほか見る所が多い。

(鷺羽山)

見下ろせば瀬戸は手の内鷺羽山

近くの下津港の旅情も捨て難い。

(帝釋峽)

秋に来て秋の彩する神竜湖

落葉踏みつつ歩く湖畔もよい。

(三 次)

思い出を三次に残す土堤団子

団子とは遊女の事を言う。中国山系の町。

(福 山)

駅に着き福山城が目に入り

近代化された福山で目につくのはお城。

(鞆の浦)

鯛網へ歓声あげる鞆の浦

美しい仙酔島は手の届く所に浮く。

(尾 道)

文学のこみちを抜けて千光寺

千光寺から向島を越して内海が見える。

(竹 原)

町並は静か竹原古い町

頼山陽が出たという竹原の散歩道。

(音戸の瀬戸)

太陽を戻す音戸の瀬は速し

清盛が入り陽を戻したという音戸の瀬戸。

(広 島)

原爆は悲しドームに祈り満つ

広島市電大阪のも交り

牡蠣もよし広島菜漬を母に買い

広島と言えば原爆、平和の祈りは世界から。

(三段 峡)

三段峡舟を休めて酒を飲む

珍しい三段の滝へつづく峡谷の美。

(宮 島)

廻廊に潮満ち宮島景になり

日本三景の一つ、遊覧客が絶えない。

(岩 国)

錦帯橋架橋の粋をふと偲ぶ

錦帯橋の美しさに外人もカメラを向ける。

(防 府)

西国を守る防府の天満宮

朱塗りの社に先ず眼を見張る。

(山 口)

京に似た山口静かな佇い

ザビエル聖堂雪舟庭園等見るところも多い。

(秋 芳 洞)

洞内に川あり風が生温い

東洋一の大鐘乳洞、驚嘆するばかり。

(長 門 峡)

長門峡見惚れ途中で日が暮れる

美しい峡谷は長々とつづく。

(下 関)

怨念を残しつつける平家蟹

源平合戦と日清談判、下関に史跡がある。

(淡 路 島)

岩屋へは行き交う船を抜けて着き

白砂青松洲本で海の幸拾う

福良から観潮船で渦を見る

温暖な淡路は果樹園と釣客が多い。

(小豆島)

銚子溪野猿の群れに囲まれる

朝雨がはれて彩づく寒霞溪

二十四の瞳が残る分教場

オリブと醬油、小豆島は観光地。

(芸予諸島)

生口島西日光の威容見る

大三島大山祇社に残る武具

島々に灯がつき芸与暮れかかる

点々と島がつづく芸与諸島は内海の美。

〈四国の巻〉

(高松)

高松でさぬきうどんの昼にする

玉藻城海を引き入れ静かなり

高松は四国の玄関、さすがに活気がある。

(栗林公園)

冬もよし栗林海の匂うところ

名園栗林公園は宏大で美しい。

(屋島)

南嶺で見る源平の古戦場

屋島台地からは内海が一目。

(丸亀)

武家屋敷つづき丸亀の大団扇

団扇の産地町を歩くと真近に城が見える。

(琴平)

石段の数を中途へ来て忘れ

こんぴらさんで親しまれ石段が多い。

(祖谷溪)

おばさんに励まされてるかずら橋

谷底を見るときもう渡れない祖谷の秘境。

(大歩危小歩危)

大歩危の紅葉は風を呼んで映え

えぐられたような溪間、列車から見える。

(徳島)

徳島で阿呆になつた阿波踊り

十郎兵衛屋敷でお鶴の悲話を聞く

夏は熱狂する徳島も、普段は静か。

(鳴門)

光る海ただ渦潮の音を聞く

淡路島は目の先、鳴門わかめも旨い。

(和佐)

海亀が来るまで日和佐宿で待つ

海亀の産卵地日和佐は長い海岸線がつづく。

(室戸岬)

室戸岬立てば太平洋の海

太平洋に突き出た室戸岬は豪快。

(竜河洞)

洞窟の深さポトリと水が落ち

洞内巡りには上衣も貸してくれる。

(高知)

川のないはりまや橋は朱に映える

桂浜しばらく月と遊ぶ波

土佐犬と尾長鶏、さわち料理がうまい高知。

(足摺岬)

足摺の眼下は波が砕け散る

白亜の灯台が荒浪に映えて美しい。

(竜串)

竜串の奇岩しばらく立ちつくす

串の歯のように突出した岩は絶品。

(宿毛)

相宿で魚拓を見せる釣自慢

静かな港町だが釣客が多い。

(宇和島)

怪獣のはしり宇和島にいる牛鬼

城山から見る宇和島は美しい。

(大州)

肱川の流れ大州に鵜が競う

大州は「おはなはん」で名が知られる。

(松山)

松山でふと坊ちゃんを思い出す

文学の香りがする松山。

(道後温泉)

振鷲閣旅装を解いて湯に入り

道後名物共同浴場、浴衣でくつろげる。

(今治)

来島の海は行き交う船ばかり

今治はタオルの産地、海の銀座来島は近い。

△北九州の巻▽

(門司)

海峡の幅を関門橋が見せ

和布刈公園から見る関門海峡は絵のようだ。

(小 倉)

小倉城祇園太鼓に涙あり

無法松の像が駅前にある。

(博 多)

九州へ来たなと思う博多駅

人形へふと足止めてみる博多

筈崎も香推も詣って来た博多

福岡というより博多で通る九州一の大都会。

(志 賀 島)

漢よりの金印が出た志賀の島

玄海灘に望んで歴史を秘める小さい島。

(太宰府天満宮)

飛梅へ天神さんにかける願

天神さんの総本家、菖蒲咲く時も是非。

(二日市温泉)

武蔵寺の藤美しく垂れ下り

博多の奥座敷だが静かな佇いの温泉。

(唐 津)

曳山に唐津くんちがしのばれる

佇びと寂び静かに見せて唐津焼

玄海灘を睥睨する唐津城、魚がうまい。

(虹の松原)

鏡山虹の松原眼のあたり

唐津湾の風光が一望出来る。

(呼 子)

港町呼子は情緒沸くところ

奇勝七ツ釜へは船で行く。

(名護屋城址)

はかなくも夢だけ残る城の址

秀吉の野望も今は夢のまた夢。

(平 戸)

オランダ堀ジャガタラ文にある涙

平戸は異人さんの匂いが漂う。

(九十九島)

九十九島夕陽は遠くでまだ落ちず

海中に点在する島々が美しい。

(佐 世 保)

船造る佐世保に弓張岳の景

軍港も今は自然に挑む基点になっている。

(西 海 橋)

瀬戸の渦真下に見せる西海橋

干満の海水が狭い瀬戸に殺到する。

(長崎)

長崎の一つを写す眼鏡橋

蛇踊りをふと思ひ出す孔子廟

すれ違ふオランダ坂で逢つた女

長崎をきれいに見せるグラバー邸

平和への祈り浦上天守堂

とに角来て良かつたと思ふ長崎。

(小浜温泉)

夕陽まだあかあかとして小浜の湯

海に湧く温泉、海岸線に湯宿が並ぶ。

(雲仙)

雲仙のつづじバックにハネムーン

落ち着いた湯宿が多い温泉、春秋賑う。

(原城跡)

天草の乱に燃えつく原の城

キリシタン弾圧に蜂起して落城した。

(島原)

お湯が湧き島原史情見せるとこ

島原の乱で焼失した城も復元した。

(柳川)

柳川のロマンを誘うドンコ舟

北原白秋と舟下りで知られる詩の町。

(熊本)

清正の偉業熊本城に見る

水前寺五十三次池に見せ

馬さしで一杯君と僕の宴

熊本と言えば清正公が浮かぶ程、縁は深い。

(菊池温泉)

溪谷を歩き疲れて菊池の湯

菊池溪谷をそぞろ歩くのも旅である。

(阿蘇山)

草千里阿蘇は不気味な音をたて

火口からこわごわのぞく阿蘇の山

世界一のカルデラ火山外輪山が遠くに囲む。

(栃ノ木温泉)

山峡の湯治も楽し鮎返し

露天風呂から見える滝で鮎が引き返すという。

(杖立温泉)

一軒の湯宿に県が二つある

狭い溪谷の温泉。二県が跨るのも珍しい。

(日田)

水澄んだ流れに競う屋形舟

小京都日田は美しい水の町である。

(天ヶ瀬温泉)

川風に吹かれて入る露天風呂

河岸に並ぶ温泉に情緒がある。

(竹田)

荒城の月の音色が出る竹田

近くの岡城跡に滝連太郎の碑がある。

(臼杵)

首だけの石仏大きな影になる

臼杵と石仏、一度は見たい所。

(別府)

別府の湯地獄巡りは明日にする

余りにも有名な温泉地、地獄巡りも楽しい。

(高崎山)

高崎の猿に人間からかわれ

野生猿の群棲は見事である。

△南九州の巻▽

(天草五橋)

天草の口マンは五橋越えてから

パルラインと呼ばれ天草への夢をつなぐ。

(天草松嶋)

船で見る五橋松嶋は人を呼ぶ

遊覧船で見る五橋に趣がある。

(本渡)

殉教の血汐を埋め祇園橋

本渡血戦と言われ出丸跡に十人塚がある。

(牛深)

牛深は南の果てで漁業基地

天草の最南端、昔は花街が賑わったとか。

(人吉)

人吉の古墳歴史の中にある

相良藩の城下町、ここから球磨川を下る。

(球磨川下り)

球磨川のしぶきの中で唄を聞く

九州の急流は唄になり、絵になる。

(鹿児島)

鹿児島島の歴史城山からのぞく

南州の重さを知って基地拌む

噴煙を磯庭園でまともに見

東洋のナポリ、島津七百年の歴史がある。

(桜 島)

桜島遠くで見れば美しい

大噴火の記録は生々しい。大根が有名。

(佐多岬)

さい果てへ来たなと思う佐多岬

遠くに種子島、屋久島を望む。

(指宿温泉)

波を聞く砂むし風呂の爽やかさ

砂場とジャングル温泉、指宿はお湯どころ。

(開聞岳)

薩摩富士長崎鼻を引き寄せる

どこから見ても美しい富士に似た開聞岳。

(枕 崎)

枕崎カツオを積んだ船戻る

カツオまたカツオで明け暮れる枕崎。

(坊ノ津)

船みんな出て坊ノ津は坂ばかり

昔、密貿易で栄えた坊ノ津も今は静か。

(新川溪谷)

ラムネの湯あつて静かな溪谷美

溪谷を歩いていると湯宿から誘う。

(霧島温泉)

湯上りの団体さんが聞く神話

特に林田温泉は大きくて団体さんばかり。

(霧島神宮)

神宮へ静かな心で詣る朝

早朝参詣すると如何にもすがすがしい。

(えびの高原)

若者が溢れえびのはいま夏

幾多の火口湖があり、キリシマつつじがよい。

(都井岬)

黒潮の流れをよそに都井の馬

野生馬が遊びに来てくれる。

(鶴戸神宮)

岩穴におわして拝む鶴戸の神

前方は太平洋がひろがっている。

(日南海岸)

ハネムーンばかり日南当てられる

日南海岸での一人は寂しい。

(宮 崎)

宮崎はフェニックスがよく似合う

戦後近代化した宮崎、南九州への足がかり。

(推葉)

ひえつぎの推葉は遠いなと思ふ

山また山、平家部落に鶴富姫の恋がある。

(高千穂峽)

高千穂峽真名井の滝をかいま見る

神話のふるさと、岩戸神楽が見られる。

〈沖繩の巻〉

沖繩本島

(那覇)

那覇に来てジャンボステーキ食べてみる

夜歩く国際通りまぶしくて

さすが那覇、南国の香りがいっぱい。

(首里)

守礼門民族衣裳の娘と写し

琉球王国の首都だった首里。

(玉泉洞)

風葬の跡も哀しい玉泉洞

長い鐘乳洞に四十年前の支洞がある。

(摩文仁の丘)

英霊が眠る摩文仁の丘悲し

都道府県の戦災者の慰霊塔がある。

(ひめゆりの塔)

壮烈な女子学生のみたまいま

小説と映画にもなった女生徒の殉忠碑。

(東南植物楽園)

面白くトックリヤシの樹が並ぶ

熱帯植物の数々が植えられている。

(万座毛)

万座毛ひろびろとして海望む

琉球王が賞めたたえたという景勝地。

(海洋博記念公園)

海洋の美をそのままに南の陽

特に水族館は内容も豊富で、見応えがある。

(桃林寺)

ハイビスカス頭に挿して桃林寺

若い女がじつと拝んで動かない。

石垣島

(宮良殿内)

石積んで宮良殿内は屋敷跡

沖繩の土族屋敷と言われている。

(川平公園)

七色の海に育った黒真珠

吸い込まれそうな海に泳いでいる熱帯魚。

(宮良川ヒルギ林)

うっそうとヒルギ林の中に佇つ

南国特有のヒルギの群生地。

竹富島

(コンドイ岬)

若者の恋占いに星の砂

竹富のロマンはこの星の砂から生まれる。

(安里屋家)

安里屋ユンタ今にも聞こゆ安里屋家

全国に知られた民謡、南国の花がきれい。

西表島

ヤマネコも見ず西表樹が茂る

原生林に包まれた西表島、これぞ秘島だ。

あとがき

やっと「日本よいとこ」を完了した。振り返ってみると旅の案内記のような句と文ばかり並べたが、これも止むを得ない事と思う。

狭いながら長い日本列島、風俗も環境も言葉等も多種多様で、それぞれの特徴と美しい風景に包まれ、本当に日本は良いところだと思う。

その後行った所もあり、まだまだ尋ねてみたい所も沢山あって万全とは言えないが、他日いくらか補足して、より以上日本を知って貰いたいのが願いである。

海外編

〔タイ〕

バンコク所見

ドアのないバス鈴成りのまま走る

象の鼻 観光客の手に預け

ヒリヒリとしてタイのないタイ料理

メナム川

メナムの濁り聖なる誇り崩さない

王様の写真を飾り水に生き

水上マーケット

果物の香りいっばいに舟揺るる

舟市へ朝の生気が蘇る

暁の寺

香の匂い一段毎に抜ける塔

暁の塔から明けるバンコック

エメラルド寺院

素足をとめてエメラルドの輝きを見る

王宮

王様の居られるタイの美しさ

黄金仏寺

ひれ伏してみても黄金の仏さま

これみんな金かとも一度仰ぎ見る

〔シンガポール〕

ごみ一つシンガポールに落ちていず

植物園

ゴム園にランの花ある植物園

ヒスイの家

邸内に集めヒスイの美しさ

〔香港〕

海峡の光り東洋の蛍籠

二階バス二階電車とすれ違い

空港を出るとそこから自由都市

香港で頼まれ物を二つ買い

タイガーバームガーデン

伝統と神話に生きる胡文虎園

アルーデン

母が漕ぎ子が売る舟がゆれている

水中レストラン

活き魚見せて水中レストラン

〔マカオ〕

リスボンホテルカジノ

カジノの灯その一瞬に期待する

聖ポール天守堂

天守堂マカオの顔になって佇つ

モンテの砦

大砲が一つ砦にある孤独

〔台湾〕

円山大飯店(台北)

豪華さに一度はカメラ向けてみる

忠烈祠(台北)

忠烈祠まばたきもせず兵が佇つ

故宮博物館

溜息の秘宝五千年のまま守る

駈け足で感心ばかりして回り

竜山寺

神片の祈りひれ伏す竜山寺

台中

宝覺寺弥勒大仏笑み給う

日月潭

湖に色彩を増す文武廟

日月潭 今日も霧なり舟も見ず

台南

赤次楼鄭成功の風動く

高雄

万寿山台湾ざくら散り急ぐ

澄清湖九曲橋で恋拾う

花蓮

峡谷の深さを刻む大理石

大理石重なり合うて岩屏風

素朴さに唄ありアミーの娘達

〔ハワイの四島〕

(オアフ島)

ホノルル空港

不意打ちにキッスレイまでかけられて

ワイキキ

見上げればビルとココナツそして空

ダイヤモンドヘッド

ダイヤモンドヘッド暁雲が突つ走る

パンチボールの丘

ローマ字の墓日本の血も交り

ヌアヌパリ

ヌアヌパリ物言う声が散つて行く

ポリネシア文化村

民族の誇りも生地のままの村

(カウアイ島)

右に見て左に花のカウアイ島

ワイメア峡谷

ワイメア峡谷色の変化に陽を忘れ

ワイルア川

日本の唄でワイルア川上る

シダの洞窟

洞窟の神秘音ない音がする

(ハワイ島)

キラウエア火山

女神の嫉妬火口の肌に見る

黒砂海岸

海碧く黒砂つぶやく音がする

ヒロ公園

人気ない緑を小鳥案内する

コナ

晚餐へ海あかあかと燃えるコナ

(マウイ島)

高見山転んだ日に来たマウイ島

カルファイ

ブルメリアの香りハワイっ娘が笑う

ハレアカラ火山

銀剣草雲は遥かな下で浮く

キビ列車

弥次喜多はマウイにもあるキビ列車

むらさきの章

- ・小僧大きくなったな
- ・路郎先生と私
- ・川柳の灯を消すな
- ・トラ談義
- ・亡妻の唄
- ・かかる子は一人
- ・トトごはん
- ・思慕・梅田界限
- ・パンと牛乳と福神漬
- ・影のスター
- ・津軽の人々
- ・九州人情ひとり旅

小僧大きなたな

——小林二三さんと私

戦後もようやく落ちつきを取り戻した昭和二十五、六年頃だったと思う。用事があつて会社の三階にある社長室前を通りかかった折、バツタリ出会頭になつたのは公職追放を解かれたばかりの元社長小林一三さんで、私は思わず体を硬直させて立礼をしました。

小林さんといえば、ご存知阪急電鉄の創始者であり、宝塚をはじめとする阪急グループを創り上げた人です。我々阪急社員にとっては神様みたいな雲の上の人で、思わず立ちすくんでしまったのも無理はありません。

その小林さんが私を見てつかつかと寄つて来るなり、

「小僧！大きなたな」

としみじみ見て言われたまま、秘書を促して去って行かれた。呆然として立礼していた私にとって、深い慈愛と励ましのお言葉であつたのが徐々に判つて来た。

これには、私が阪急に入社した当時のことを説明しないと判らないと思います。

大正十一年八月一日、出社通知の葉書を持って阪急本社を尋ねました。神戸線を開通させ、社名も箕面有馬電気軌道が阪神急行電鉄に変わり、梅田駅前には人力車がズラリと並んでいた時代で、まだみのお電車と呼ぶ方が親しまれていた時です。駅の東端に五階建の小さなビルがあり、一階は白木屋マーケット、二階は阪急食堂、三階以上が電鉄の事務室になっていました。が、その一階の殆んどが白木屋が使っていて僅かに東端の裏側に階段とエレベーターがあったが、物置のような所だったのでウロウロしていると、後から中年過ぎの背の低い人が来て

「君、君何か用かね」

と問われたのでハガキを見せると、

「判った。君それを持ってついて来給え」

といわれるので見ると目の前に大きな郵便受があり、郵便が一ぱい溜っていた。それを持って三階までノコノコついて行くとう入口があり、扉の中へ入ると室内はカウンターを挟んで通路、その両側に机が並んでいた。その人が入って行かれると中の社員達は一斉に起立して頭を下げるのでこの人は偉い人だったんだなと思ひながらついて行くと、一番奥の庶務課と書いた札のある所で一人の社員を呼んで

「会いに来ているよ」

と言ったまま、奥の部屋に消えてしまわれた。私は課長と係長に面接してその場で入社決定、おまけに即日勤務という想像もつかない幸運で阪急に拾われました。後で判ったのですが、先程一階から案内をしてくださったのが小林一三さんで、この時はまだ専務でしたが、社長は常駐でなかったので事実上の代表者でした。

早速、与えられたのが専務室勤務、まだ秘書という役柄はなく、庶務課が代行していました。秘書のような仕事といえば聞き馴れはいいが、つまり給仕だったのです。この仕事を一年半ほど勤めさせてもらい、お陰で今太閤と言われる偉人の側で過ごせたことは、私の人生に大きなプラスとなりました。

その後、技師長付になり土木課へ編入され、小林さんは社長を辞められてから東電社長、戦中は近衛内閣の商工大臣、戦後、復興院総裁から公職追放、とても程遠い人となっておられました。あれから三十年ほど過ぎた今、偶然にお逢いし、思わずかけてもらった言葉が、

「おお小僧、大きくなったな」

下級社員の私をいつまでも小僧として覚えてもらっていたのが、本当に嬉しかった。あの頃から私の名を呼ばずに、「小僧！」「小僧！」で通しておられたので、つい口に出たのでしょ

う。それに相変わらず小柄ながら、その時は係長という役職にもついていたので、その次に出した言葉の「大きくなったな」は成長したなととれる情の籠った慈愛に触れた言葉でした。

一三さんといえば宝塚を歌劇の町にただでなく、沿線の住宅開発、ターミナルデパートその他、途轍もない事業経営で今の大阪急グループを創った人ですが逸話も多く、各種の本に登載されていますが、私が身近にお仕えて得た二、三を話しますと。

小林さんは手紙のやりとりを特に大切にされていて、公用以外は自分でそれも毛筆で書かれています。たまたまその手紙に切手を私が貼りましたが、少しずれていました。それを見るなり、

「君、手紙というものは、こちらの心を相手に伝える大事な使者だよ。例え封筒に貼る切手でも、心をこめて行わないと誠意が通じない」とたしなめられました。

達筆な墨書で認められる姿勢は、今だに私の眼の中に残っています。

暇のある時は、古い封筒や要らなくなった書類を持って来て裏返しにし、封筒作りもやられました。これは専ら社内用に使うためだったので。

小林さんのトイレの長かったのも有名です。出社されると必ず二、三部の新聞を提げてトイレに行かれます。じっくり新聞を見、そして一日の構想を練られていたようです。だからトイ

レも小林さん用のものが作ってありました。

こんな事がありました。当時の電話、特に社内用のものはすべて手回し式の卓上機か壁掛式で、グルグル回す度合で相手呼び出す信号式でした。私の机の横にも、一つ壁掛式がありました。それが普通の人なら何でもない高さだったのですが、低い背の私には背伸びしてやっと届く高さだったので苦心して掛けている姿を小林さんが見られ、直ぐ係の人を呼んで、

「君、あれでは可哀そうだ。踏台を作ってやれよ」

と、即日用意してもらいました。小さな茶飯事ですが、怖い小林さんにもこんな心づかいがありました。

(昭52・4 本社句会柳話から)

路郎先生と私

路郎先生との出会いは昭和八年頃の大鉄畔柳社の句会であった。水客君に誘われて行った畔柳社の句会は、福田山雨楼さんが指導されていて、そこへ麻生路郎先生が顔を見せられた。

それがきっかけで当時、大阪南の誓得寺で開かれていた川柳雑誌社の本社句会にお伺いする

ようになり、先生の恩情溢れるご指導によって不朽洞会員に水客、潮花と共に入会させて貰い、句会にも欠かさず出席する内、句会部のお世話をするようになった。その後、句会部長としての重責を担わされる事になったのも先生のお言葉だった。

先生の奇抜なお考えで通常句会の他、いろんなユニークな会も催した。夜桜川柳会、動物園川柳会、プラネタリウム川柳会等の他、義士の夕べと題した川柳会には現地まで行って賞品を調える熱心さであった。

戦争に突入すると句会を開くにもいろんな制約もあり、特高警察監視の中で緊張した句会を開いたり、警報が頻発する中で、防空態勢のまま薄暗い管制球の下で句会を開いた年もあった。戦後間もなく、妻を亡くした朝、突然見舞に來たと言われる先生を啞然とさせた話。

特に私ら三人の合同句集を立案し、お膳立てまで考えて貰って三人の句集が出来た時、即日売り切れという前代未聞の成果を得た事も先生のお陰である。

その後、路郎先生が亡くなられ、川柳雑誌が川柳塔に代わっても、門下一同が先生の意志を受けつぎ、ますます盛んとなりつつある事は慶びに堪えない次第です。

川柳は不滅、そう私は信じている。

川柳の灯を消すな

“いのちある句を作れ”

これは私の師、麻生路郎先生が常に提唱されていたのは周知の事であるが、も一つ私には忘れられない言葉がある。

“川柳の灯を消すな”

それは大戦も終局に近づき、既に先生主宰の川柳雑誌も奉還して打ち続く敗戦にみんなの心が暗くなっていた頃、大和へ疎開されていた先生から「こんな時だからこそ士気を鼓舞し、心の余裕を持つ為に川柳を作らねば駄目である」というお言葉によって、時々、柳人宅を持ち廻りして句会を開いた。

昭和二十年の早春、日が暮れると大阪堀江の某氏宅へ集まったのは六、七名だったが、路郎師を中心に防空頭巾と巻脚絆に身を固め、薄暗い管制球の下で寄り添うようにして作句した。警戒警報のサイレンが鳴ると身を潜め、いつでも防空態勢のとれる構えであった。それでも作句に情熱をもやし、先生の論評を真剣な眼差しで聞き入ったものです。

それから数日後の三月十日、大阪大空襲に会い、会場だった某氏宅も灰燼に帰した。

一望跡型なきまでの焼野原、瓦礫の中に茫然と立っていると、ふと耳元に先生のあの時のお言葉がかすめた。

「いつの日か日本は立ち直るだろう。だから川柳の灯を消すな」。

それは私の空耳だったかも知れない。

しかし川柳雑誌復刊の日は早かった。それは薄っぺらな復刊号だったが、先生の情熱と気概と信念がそうさせたものと思う。

その先生が亡くなり、川柳雑誌から川柳塔へ引き継がれても、師の言葉は永遠に生きつづけて行く事だと思う。

ト ラ 談 義

昨年（六〇年）はプロ野球で阪神が日本一になり、トラファイバーを起こした事は先刻ご承知のとおりである。私の家にもトラキチが二人居て阪神が勝つたびに「六甲嵐」が夜遅くまで吹き荒れた。

それに対抗した訳でもないが、お隣の阪急電車は経営する宝塚ファミリーランドに白い虎、ホワイトタイガーをお目見得させて同動物園の目玉商品として宣伝している。トラが三つ重なりと過去に悲しくも忌わしい歴史を持つが、先ずは二つで寅歳を迎え、ますます盛んになろうとしているのはお目出度い限りである。

トラ歳といえ、東野大八先生もその一人である事を川柳雑誌四一六号（昭和三七年一月号）で知った。同誌に寄せられた「トラ歳など不用のこと」なる一文は躍如として先生の姿が浮かぶ。先生のご両親も寅歳、姉さんが午、奥さまが未という事で、ハタと私の身辺も同じである事に気付いた。私の父が寅で母と姉が午、そして私が未、不思議な取り合わせである。

先生が少年の頃、干してある酒樽に雨水が溜り、ドブ酒になった中へ落ちて大トラになられた話が面白く書かれている。私の小さい頃、悪童に縄で縛られ、誤ってドブ川に落ちた時ついた傷が未だに眉間に残っている。大トラになった先生と、ドブ鼠になった私とではやはり格が違うのかも知れない。

寅歳の父は普段おとなしい性格だが、酒を飲むと一変して機嫌が悪くなる時が多かった。いつか書いたように父が福井座という芝居小屋を仕切っていた頃、まだ端役だった中村珊五郎（後の曾我廼家五郎）に何か気に食わぬ事があって、酒気を帯びた体で追い廻した揚句の果て、舞台から奈落の底へ落ちた話を母から聞いた事がある。一方は身軽に脱兎の如く逃げたが、酔虎になった父は大怪我をした。その福井座も本当の経営者は母の親代わりだった人で、父は虎の威をかる狐だったのかも知れない。

虎の絵が好きで、いつも床の間の軸に虎の絵を掛けて楽しんでいた。その一軸も父が亡くなってからどうしてしまったか、今は家に残っていない。

同じ年の川柳雑誌二月号へ新年句会に出た兼題「虎」が発表されていて西尾栞さんの句に

駅前宿にもあった虎の軸

というのがある。よく旅をして泊った宿で見かける風景だが、昔は威儀を保つものとして虎

の軸が喜ばれた。

ともあれトラ年を迎え、心を新たにして泰然自若に辺りを睥睨したいものである。

(昭61・1 川柳塔誌)

亡妻の唄

省線(当時そう言っていた)福山駅から一時間、山の中の峠茶屋でバスを捨てた。そこで待っていた妻の兄に迎えられ、獣道とでもいえるような細道を枝やら下草を払いつつまた一時間余歩くと、そこが妻の実家だった。

初孫を見せに妻と里帰りしたのだが、周りは家もなく、山を開いた段々畠を通して谷の向こうにある家が隣だと言う。夜になると電灯がないのでランプが灯った。その頃でもランプは珍しかった。えらいところで生まれ育ったもんだなと改めて妻の顔をじっと見た。

薄給だった私を助けて懸命に習い覚えたミシンを踏み、僅かな手間賃で近所の子供達の服も縫った。学歴も素養もない妻だったが、私の趣味に馴染もうとして川柳も作った。

もうこんな人出になつた海の色

波矢子

川柳雜誌岡町支部の世話をしていた頃、家の周辺は田圃ばかりだったので、蛭狩り句会をやるうということになり、鮎美、古方、三司、黙平、風葉等、十人ばかり集まつた。勿論、盟友水客、潮花も交つている。前日から妻は小川に入つても蛭を採り易いようにと、近所からゴム長靴を借り集めたり、当日不漁だと申し訳ないと、子供達と共に大きな蛭籠にいったい蛭を先取りしていたし、土産に持つて帰れるようにと古蚊帳をつぶして蛭袋も作つた。

やはり当日は不漁だったが、先取りした蛭の一部を庭に放し気分を味わい、土産の蛭も持つて帰つて貰つたので満足してくれたと思う。

人呼んで馳走をしたり、相談に乗つたりするのが好きで、土木部にいた頃、私の部下である線路工夫（保線士）がいつも遊びに来た。言葉の荒い節くれた人達だったが、在所の人が多いので「うちで作つた野菜だ」と言つて届けてくれた。大戦中でも一切買出しはせず、もっぱら休閑地を借りて芋や麦の主食と野菜を作つた。田舎生まれが役立つたのである。

その妻が戦後間もなく病に倒れた。

「おとうさん、わたしもう目が見えなくなつた。手を握つて、にぎつて」

と病み細つた手を差出すので、力強く握つてやると満足そうに笑みを浮かべた。それから間

もなく息をひきとった、早朝である。

突然、今まで来られたことのなかった麻生路郎先生が近所の人でごった返す中を、見舞いに来たのだがと前置してよたよたと座られた。

「そんなに悪かったのか」

と啞然として手を合わされたのが、未だに眼に残る。

時は昭和23年5月1日、初めて我が国にサマータイムが実施されたメーデーの日だった。

(昭59・5 川柳塔)

かかる子は一人

私の母が生前よく「なんぼ子供がいても、かかる(厄介になる)子は一人」と言っていた。

実際私の母の場合、十四人の子供を持ちながら上から順に早逝して、末弟である六男の私が両親の死に水をとった。運命と言えばそれまでだが、それだけで片付けられない縁が、母の言う

「かかる子は一人」の言葉に、今更のように引きつけられる。

子供の頃、隣に〇のいう家があつて、三人の兄弟が居た。上と下が学校の出来もよく賢い子だったが、中の子は頭が悪かったのか成績も悪く、他の兄弟から馬鹿にされていた。それがどうしたとか、小学校を卒業する六年生の時、全校生徒を代表する生徒長になり、卒業の挨拶をするようになっていた。きつと何かのきっかけで発憤したのだろうが、後年に弁護士になり、一寸は人に知られる程、成長していた。この場合は、努力が運命を変えたものだろうと思う。

○

過日、テレビで吉岡たすくさんを交え、「人間教室」という番組があり、その中で、同じ両親、同じ環境の中で生まれた三人の子供でも、それぞれ長所も短所もあつて性格も違つて育つて行く話をユーモアをまじえて聴かせて貰つた。その三人の子の中で上の二人は学校の成績も良く、親達も将来を楽しみにし頼りにしていたが、長ずるに従つて親から離れ、夫に先立たれて孤独になった母を見捨てた。期待もしなかつた末弟が、良い嫁を貰つた故もあつて、傷心の母を引取り、余生を楽しく暮らさせているという世間によくある話だったが、話上手なたすくさんの言葉に魅せられ、運命という事だけで片付けられない何かを感じた。

ト ト づ じ は ん

私には十四人の兄妹がある。その十二番目で六男である。私の生まれた頃は底抜けの貧乏だったし、一番上の兄は八尾中を出て大阪市電に勤めていた。

この長兄が私を自分のこどものように可愛がってくれた。末弟でもあるし、大家族を減らすように次兄から養子に出たり、夭折したりしたので男は私だけが残った。

ようやくひよこひよこ従って歩ける二歳の頃、休日だった長兄が南へ遊びに連れて行ってくれた。道頓堀から千日前へ来て鰻を焼く匂いがすると、思わず座りこんで

「トトごはん食べたい」

とねだったのが、折悪しくその日は長兄の懐具合が寒かったので、私を宥めすかして帰ろうとしても言うことを聞かない。そして出た言葉が、

「トトのうてもええからトトごはん食べさせて」

要約すると、鰻が入っていないなくても良いので鰻丼食べさせて、といういじらしい言葉に兄も

思わずつまされて、なけなしの財布をほたいていずも屋のまむしを食べさせてくれたという話を、長兄が死んでから母が私に聞かせてくれた。

それ程、幼い頃はまむしが好きであり、よく父母に連れられていずも屋に行った。

思慕・梅田界限

「大阪も変わったものう」

隣に居たお婆さんが頓狂な声で言った。最近出来たアクテイ大阪（大阪駅ビル）の二十七階展望所で何となしに風景を見下していた時の事である。成程、大阪も変わったもので高層ビルが林立し、高所から見る大阪も見慣れて来た私であったが、その言葉にふと感傷を覚えた。

そういうえば私が阪急電鉄に勤めだした大正の末期、ここから見える淀川大橋も車が通れば揺れるチャチなものだったし、河原では弁当を拵げて飲めや唄えやの宴も開いていた。

この真下の大阪駅も梅田ステーションとして親生まれ、総石造りで両翼のついた明治の匂いがプンプンする瀟洒な建物だった。その前に人力車がずらり並んで客待ちしていた。中には相

乗りの車もあって、粋な男女の客が道行としゃれたという。

また、前方を市電が走り、片道五銭の運賃が朝七時までに乗ると七銭で往復切符を呉れた。今の西阪神ビルが阪神電車の梅田駅で二階にあった小さな食堂の朝食は美味く、東の阪急食堂の二十銭カレーと味と安さで競っていた。市電を越した南側は土産物屋と旅館が軒を並べて、土産物の主役はやはり粟おこしだった。

御堂筋がまだ狭かった時で、北と南とを結ぶ幹線道路で曾根崎、堂島とつづき、北新地は夜になると賑っていた。当時も大阪一の交通量を誇り、自動車こそ少なかったが、荷車、馬力、それに人の往来が激しく、信号がつくまでは田中という口髭の立派な巡査が手信号で「オイッ コラッ！」と怒鳴りながら捌いていた。いかつい割合に優しいところもあったとみえ、人気があつて名物になつていた。

富国ビルあたりに市電の車庫があり、お昼になるとタンクの形をした水撒き電車が出て行った。間もなく車庫が廃止になり空地となつていたが、東京の相撲協会が分裂して出来た革新力士団が天幕を張り、トーナメント式の大相撲興行をしたりした。名力士大の里、怪物男女ノ川もその中に居た。車庫裏に「いちま寿司」という店があり、からまぶし（鰯のにぎりに三杯酢で味をつけたおからをまぶしたもの）が美味だった。

大本教が主宰した大正日日新聞社跡が今のナビオ阪急になっている。その前を阪急が路面を走った。国鉄を越す跨線橋が道路と併行してつくられ、ガタゴトと動いていた。

その跨線橋上で小学校卒業以来、久しく会わなかった潮花君とバッタリ遭遇し、それ以後、今まで友情がつづいている。

(昭58・11)

パンと牛乳と福神漬

水客君と二人でよく旅を楽しむが、昼は簡単に必ずと言ってよい程、その土地で名があり、何か特質のある喫茶店に飛び込み、パンと牛乳で済ませる。そんな喫茶店は、旅行案内書か風聞を頼りにして探す。それも旅の一つの楽しみでもある。

昼をパンと牛乳で済ませるのは、ポリウムのある食事をすると、満腹感から十分に見て歩きの観光が出来ないと、その喫茶店には土地の人達が寄って話をするのが耳に入る。それから土地の匂いを感じる事が出来、空気に触れられる。又インテリア、食器、サービスにもそ

れぞれの特徴があり、時としてこんな田舎で、と思う事がある。味に一見識を持つ水客君でもこの線を崩さないのは、そういった理由からである。そのかわり、夜は宿その他で財布の許す限りの贅をとる。ついでに耳打ちをすると、水客君は海老と蟹が好物で、貝類は食べない私は逆でいつも交換をして食べる。北海道で大きな皿に乗りきれない蟹が一匹丸ごと出された事がある。私は食べないから水客君に譲ると、一匹でも毛の生えた蟹をこなしで食べるのは時間がかかる。まして二匹と来たからなかなか暇がいる。食べ終わるのを待ちきれないで、とうとう痺れを切らして先に寝た事があった。

去る日、句会に出る前に簡単な食事を済ますつもりで、大阪のあるカレー屋でライスカレーを食べた。そこについていた福神漬はとても旨かった。普通カレーについている福神漬は、着色のきつい見た眼にも不味そうなものが多いが、ここの福神漬はひと味違っていた。それに味の良いらつきようも添えてある。一寸した心遣いが、カレーの味を引き立てている。

昔、それも昭和一ケタ時代、大阪北のH百貨店の食堂で出すカレーが評判になった時がある。この食堂ではカレーだけでなく、食卓に食べ放題の福神漬が入れ物に入って置かれ、自由に食べられるようにしてあった。ランチ三十銭、カレー二十銭の時代である。貧乏学生や安サラーマン達は、ライス一皿だけとって福神漬を菜にして昼を済ませた。別に周囲を気にせず、充

分満腹出来たのだから嬉しい時代でもある。ライス一皿僅か五錢だった。

この福神漬は、店の特製で味も良かった。

影のスター

去る日、宝塚大劇場の月組正月公演が千秋楽の日であり観に行つた。

第一のショー「シャンピング」が終わり、問題の「新源氏物語」が三月の節句のような難壇で幕が開き、全二十数場、平安王朝時代の華麗で美しく貴公子源氏の君を中心とした恋絵巻が繰り上げられた。主役源氏の君を演じる榛名由梨は勿論、大地真央他のスター達の好演で、エピソードまで観衆を飽かせなかった。

大きな緞帳が降りたと思うと、その緞帳の中から老大臣の舞台衣裳のままの一人が現れてマイクを前にすると、

「私は月組の組長水城玉藻でございます……」から始まり、今日の御札を述べた後、この日を限りに退団して舞台を去る八名のひとりひとりの名を挙げ、その娘の生い立ち、宝塚での生

活と特徴、そして退団の理由を細かに話し、落ちついた調子で、時には笑いを交えて退団者の紹介をして行った。

三階までの満席は勿論、立見席に溢れた観客を魅了させた話ぶりは、実に見事で立派だった。流石に数十名の中から選ばれただけあって、堂々たるものであった。

知られているように宝塚では、雪、月、花、星と四組があつて、それぞれ一カ月半の公演を受け持つて交替している。従つて組長も各組に一人ずつあつて、数十名を統率している。これ等の組長は、正面に立つ華やかなスターではないが、永年積み上げた演技を持つてスター達を助け、時として第一級のスター以上に光り輝く事もある影のスターでもある。

組長の挨拶と退団者の紹介が終わると、再び緞帳が上がり、全員が舞台衣裳のまま整列する中を上段からライトを浴びて、退団者一人一人が降りて来て正面で別れの挨拶をした後、花とレイを受けて全員が合唱する賑やかな中を緞帳が降りた。如何にも宝塚らしい賑やかでうっとりさせられる幕切れでもあつた。

(みかん誌掲載)

津 軽 の 人 々

十月中旬、例により水客君と東北縦走を試みた。一週間以上、東北を旅するのは今回で三度目になる。津軽半島から青森、八甲田、十和田湖を経て八幡平、田沢湖、そして奥羽山脈の高峯栗駒山近くの須川温泉を最終の地を選んだ。

津軽半島の最北端竜飛岬は先年訪れたのでコースを変え、大宰治の生まれ育った金木の斜陽館を見、民謡十三の砂山で名高い十三湖を横に見て漁港小泊に着く。村役場で発行された案内書を見ると、宿五軒民宿四軒と書いてある。その一つ小泊温泉が眼に止まった。果たして津軽のこんな所に温泉が湧いているのか疑問だったが、ここを選んで投宿した。

村はずれにあるこの宿は、小屋掛のような素朴な建物だったが、成程、温泉が湧いていた。この若主人の話では、地下八十米掘ったら突然、噴湯したという。津軽半島たった一つのこの温泉は、粗末だが旅人だけでなく、村人も利用している。薄汚れた板に“とうじ湯”と書いてあった。

翌日、青森に立ち寄って川柳塔同人の工藤甲吉さんと逢い、歓談した。甲吉さんも津軽の人である。休憩のため案内された宿でご馳走をとられるのを茶漬にして欲しいと言うと、そのように女中さんに命じ、駅前で土産にとリンゴの籠を手にとられたが、これも旅の途中だから荷物になるのでと断ると、何のこだわりもなく止められた甲吉さんの純情で温い人柄が身にしみて、いつまでもいつまでも心の奥に残ってしまった。

九州人情ひとり旅

●昔、職場で世話をした娘達が沢山いるので七月の豪雨禍見舞を兼ねて長崎に来た。娘達ももう所帯を持っていたが、一人を除いて他は大した被害もなかったようであつたと思ふ、それから五泊六日の九州の旅がはじまつた。

●五泊の内、最後の霧島温泉はホテルの社長が旧知の間柄だったので、そこに泊ることにして、他は駅に近いビジネスホテルを利用した。その方が気楽で安くて便利で行動的であるし、一人旅のぶつつけ本番でも泊れた。

● 相変わらず観光客の多い長崎は、グラバー邸に動く歩道が出来、眺めも最高だが、トイレに貼ってあったポスターに「水は清くて優しい」と書いてある。水害の後だけに一寸優しいにひっかかったが、その下に「水を大切にしよう、水道局」とあり、水害以前から貼ってあったものらしい。

● 市電の料金八〇円「のりかえ」と言えば乗り換え券も呉れる。五度乗った市電で全部若い女性が席を譲ってくれたのも嬉しいもの一つである。

● 原爆公園、天主堂、崇福寺等、見るべき所も多く、稲佐山の夜景も綺麗だったが、眼鏡橋周辺の水害禍にはカメラを向けるのも遠慮した。

● 夜、女達が集まって活魚料理で歓待してくれた。中でも大きなお腹を抱えたものや、主人と子供を連れて「この人が大阪のおじいちゃんやで」と言ってくれたのには涙が出た。

● 長崎から博多行特急に乗ると、先に座っていた女が、私の荷物を棚に上げてくれたが、そのまま、本を読み一と言も口をきいてくれず、博多へ着くとまた無言で荷物をおろしてくれた。親切ではあるが、無愛想な女性だなと思っていると、別れ際にチラッと瞳の奥で笑ったのがとても清楚で印象的だった。

● 別府で地獄巡りの看板を見ていると、数名のタクシー運転手が寄って来て観光タクシーに乗

れと言う。一人だから勿体ないと断って歩きかけると、追いかけて来て安く負けるからと誘う。結局すつたもんだの末、敬老の意味で千五百円負けて貰って観光したが、どちらが負けたのか判らなかつた。でもとつつきの悪い割合に親切にガイドをしてくれたので心が休まつた。

●ひえつき節の発祥地で平家の隠れ里で有名な椎葉は日向市からバスで三時間余、山また山の奥地である。途中、一人減り二人減りして休憩地のオセリの滝ではみんな降りてしまったので、運ちゃんに尋ねると「椎葉まで行けば店も宿もある」とさり気ない。

●那須の大八と鶴富姫が住んだ屋敷のある上椎葉は、さすがに戸数も多く、店も民宿もあつたが、昼過ぎだったので食堂が開いてなく、何でも売っている店のおばさんに尋ねると「いまご飯を炊いたところだから握り飯でもつくってあげる」と言つて造つて呉れたが、金をとつてくれないので、店に売つてあつた絵ハガキと薄っぺらなひえつき節のレコードを買つて近くの鶴富屋敷へ行き、山椒の木の下で握り飯を食べた。

●城下町⁺飢⁺肥、駅にロッカーがなかつたので一時預けにすると、老駅員が一枚の地図を持って来て、小村寿太郎の生誕地、飢肥城址、武家屋敷等、道順に沿つて説明した上、地図を呉れた。予定の時間より早く廻れたのもそのお陰である。こんな駅員ばかりだったら、国鉄も騒

がれずに済んだのではないか。

●霧島神宮前駅まで迎えに来てくれたホテルの社長と神宮に詣り、その夜はそのホテルに泊った。夜は非常な歓待を受け、おまけにフロント及び客室係は勿論、調理長まで呼んで「昔、世話になった上司です」と紹介して貰った。遠い昔、僅か三年足らずの上司を老兵扱いにせず、いつまでも忘れない好意をもってくれた社長に痛い程、心をうたれた。

●翌日はその社長の車で、社長と共に人吉に出て球磨川沿いに八代まで送って貰って帰阪したが、心温る五泊六日の旅であった。

(みかん誌掲載)

あ　と　が　き

キミ、まだこんな句を作っているのかと、恩師麻生路郎先生から叱られそうで、とても句集等は出す気もなかったのですが、このたびの受賞と傘寿も過ぎ川柳を通じて親しくしてください。方が多い今、心の奢りかも知れないが、拙い句でも残す事が出来ればと思いい決心しました。

本当は水客、潮花、紫香で「続三人」として出したかったのですが、機会を失っている間に潮花さんが逝き、私の独りよがりになってしまい、申し訳ないと思っています。

その水客さんより序文を貰い、飾る本でなく親しまれる本にせよとの教訓を戴いたので、肝に命じて有難く思っています。

主幹西尾琴先生、橘高薫風編集長からも丁寧な序文を頂戴し、有難いことです。

とりとめのない川柳句文集になってしまいました。その中のどれかが読んでくださる方に心に止まる事が出来れば望外の喜びです。

本書発行に際し、田中正坊さん、春城武庫坊さん、奥山美智子さんのお力添えを得た事を付記して厚くお礼申し上げます。

略 歴

明治40年8月12日 大阪市北区で生まれる
大正11年3月 関西商工学校卒

職 歴

大正11年—昭和38年 阪急電鉄(株)勤務

(この間、昭和38年5月3日大阪府知事から産業功労賞受賞)

昭和39年—昭和49年 新阪急ホテル(株)勤務

柳 歴

昭和8年 水客、潮花と共に麻生路郎先生に師事し、
不朽洞会員となる。

戦前戦後を通じて川柳雑誌社句会部長として活躍。

昭和33年11月 水客、潮花と共に合同句集『三人』

発刊、即日売切れる。

昭和40年7月 路郎師逝去によって誌名「川柳塔」

に変わる。

昭和61年10月 川柳塔社副主幹となり、現在に至る。

昭和63年11月2日 尼崎市長から尼崎市文化功労賞

を受く。

題 簽 西 尾 葉

むらさき 黒川紫香 川柳句文集

一九八九年三月五日発行

著 者 黒 川 紫 香

〒661 兵庫県尼崎市武庫町1-47-15

発 行 所 川 柳 塔 社

〒545 大阪市阿倍野区三明町2-10-16

ウエムラ第2ビル202号室

黒川 紫香 川柳句文集